

<p>総合的な学習 教科学習</p>	<p>ねらい</p>	<p>技Ⅰ 身を守る 地震津波、火災、崖崩れ、風水害に直面した時、自他の命を守り、被害を最小限に止めるための技能を身につけることができるようにする。</p> <p>絆⑨ 共感・支え合い 被災地の人々との共感的な理解を図り、思いやりの気持ちをもって、共に支え合いながら生きていこうとする態度を育てる。</p>
------------------------	------------	---

- 【題材】
- 全校児童による防災学習と訓練の実施
 - 被災体験と被災時の対応についての講話会の実施
 - 室根町の地域のリーダーによる講話会の実施
 - 教科学習（国語科、生活科、社会科）
 - 仮設住宅との交流

【対象】 全校児童（102名）

【復興教育の視点】

- (1) 【人づくり】 郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育てる。
- (2) 【体験から学ぶ】 震災津波と向き合い、この体験そのものを「教材」とし、生きる力を育む。

【実践の概要】

- (1) 防災学習と訓練の実施（4月19日、全校児童）
全校児童が体育館に集まり、いつ、どこで地震や火災が発生しても自分の身を安全に守ることができる方法をスキルを通して学んだ。
- (2) 被災体験と発災時の避難についての講話会の実施（5月11日、3～6年生）
室根町にある仮設住宅の前自治会長さんを招き、発災時の様子を伺うことで共感的な理解を進め、生き抜く方法と知恵を学んだ。
- (3) 室根町の地域のリーダーによる講話会の実施（9月18日、3～6年生、保護者、祖父母）
室根まちづくり協議会長で、発災時に地域のリーダーとしていち早く隣町の気仙沼を支援した経験から、講話会を通して平常時の備えと、発災時の素早い対応について学んだ。
- (4) 教科学習での学び（6・7月、3・4年生）
3年生の国語科の「手紙を書こう」で単元で、震災当時のお話を伺った方へ感謝のお手紙を書く学習をした。また、4年生の社会科では「火事を防ぎ地震にそなえる」の単元で、一関市の被災状況と復旧の様子を学んだ。
- (5) 仮設住宅との交流（11月、1・3年生）
1年生は、生活科で育てたサツマイモを大学いもにして室根の仮設住宅に届けた。また、3年生はオーナー制度を活用し、総合的な学習で栽培し収穫したりんごを調理し、りんごのホットケーキにして仮設住宅に届けた。

【実践の詳細】

- (1) 防災学習と訓練の実施（4月19日、全校児童）
4月始めに、学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き（文部科学省）をもとに災害時の避難方法について教員研修会を開催した。本校や学区での過去の災害経験を紐解き、災害時の対応マニュアルの見直しを行い、本校版の対応の仕方を検討し、教職員間で共通理解を図った。その後、全校児童にオリエンテーションと防災学習（スキル）を体育館で開催した。地震想定（自宅、登下校時、在校時）や火災想定（全非常口の確認）での児童の避難方法を写真右のようにスキルを通して学んだ。



【第1次避難行動を学ぶ児童達】

また、右下の写真にあるように、平成23年度にPTAと協議の上、作り上げてきた対応マニュアルに再度検討を加え、家庭掲示用としてA3版にまとめ、全家庭、施設に配付し、周知を図った。災害時の対応マニュアルは、「Ⅰ台風・暴風雨の場合」「Ⅱ災害時の連絡方法について」「Ⅲ大地震発生時の対応について」「Ⅳ災害時の児童の引き渡しについて」の4項目でまとめたものである。



【災害時の対応マニュアル】



【防災学習（スキル）】

(2) 被災体験と被災時の対応についての講話会の実施（5月11日、3～6年生）

室根町にある仮設住宅にお住まいの前自治会長さんをお招きし、震災時の様子を伺う講話会をもった。気仙沼意志を強く持ち、仲間と協力して支え合うことにより生き抜くことができた貴重な体験から、生き抜く知恵を学んだ。児童は終始真剣な面持ちで聞き入り、質問も次から次へと続いた。前自治会長さんの「孤独死はいやだから、みんなに、今、声をかけている。」など、お話の一つ一つの言葉は重く、児童と教職員の心に深く響いた。



【被災の状況と協力の大切さを学ぶ子ども達】

【児童の感想】

Aさんの話を聞いてみて、ぼくもAさんみたいに強い心を育てようと思いました。2回も津波被害を受けているのに笑顔でいられるのは、そうとう強い心があるからだと思います。Aさんはちょっと苦しそうなお声でした。心の中は、そうとう苦しく、悲しく、きびしく、つらいのだと思います。Aさんのアパートで、3日間水だけで生きられるのはすごいと思ったし、めげずに生きられることがすごいと思いました。Aさんは「君たちには、こんな思いをさせたくない」と言っていました。それは、「苦しい思いをさせたくない」ということと、「悲しい思いをさせたくない」の二つだと思います。また、震災が起きたら、ぼくはAさんみたいに強い心で、めげない心で乗りきろうと思いました。（5年男）

(3) 室根町の地域のリーダーによる講話会の実施（9月18日、3～6年生、保護者、祖父母）

室根町と隣の気仙沼市は友好都市提携をしている。保護者の多くは気仙沼に仕事を持ち、日常的にも気仙沼は生活圏になっている。これらの関係から震災時にはいち早い支援活動がなされ報道機関等でも話題になった。この日には、室根まちづくり協議会長で、発災時に地域のリーダーとして隣の気仙沼（松岩地区）を積極的に支援した第12区自治会長の三浦幹夫さんをお招きし、平常時の備えと、発災時の素早い対応、そして室根の素晴らしさについて教えていただいた。



【ふるさと室根の素晴らしさを学ぶ子ども達】

(4) 教科学習での学び（6・7月、3・4年生）

3年生の国語「手紙を書こう」の単元では、震災のお話を伺った方への感謝のお手紙を書く学習を行った。また、4年生の社会科では「火事を防ぎ地震にそなえる」の単元で、「東日本大震災～発災から半年の記録～」（一関市ホームページより）を参考に一関市の被災状況を学んだ。内容は一関市内の人的被害、住家被害、ライフライン被害、公共施設被害、後方支援、除染作業などである。



【3年国語の学習（お手紙を書こう）】

(5) 仮設住宅との交流（11月、1・3年生）

5月に被災地である気仙沼を見学し、気仙沼からの被災者が住んでいる室根の仮設住宅との交流を望んでいた3年生は、総合的な学習で栽培したりんごを収穫し、リンゴのホットケーキにして仮設住宅に届けた。お茶会の始めに児童代表が栽培と交流について述べ、その後、召し上がっていただいた。プレゼントには子ども達による温かいメッセージが添えられ、被災者の方は喜んで召し上がっていた。また、1年生は、生活科で育て、収穫したサツマイモを大学いもに調理して仮設住宅に届けた。仮設住宅からは連名で感謝の手紙が寄せられた。



【仮設住宅の住民の方との交流】

【3年生のメッセージから】

さむい日が続いていますが、お元気ですか。ぼくは室根西小学校のBです。ぼく達は総合的な学習の時間の勉強で、「りんごの学習」をしました。11月27日のりんごのしゅうかくの時には、さむくて耳がいたくなかったけど、がんばってしゅうかくしました。今日はりんごのホットケーキを作りましたのでどうぞおめしあがりください。みんながえがおになるように心をこめてつくりました。これからますますさむくなりますが、どうぞお体に気をつけておすごしください。 11月30日 かせつじゅうたくのみな様へ




【まとめ】

(1) 成果

- ①防災学習や訓練の実施、学校防災マニュアルの見直しを行うことで、家庭や地域と連携しながら自他の命を守る技能を身につけることができた。
- ②被災地見学や、被災者による講話、被災者との交流を行うことによって、被災者の方々への共感的な理解が図られ、思いやりの心を育てることができた。

(2) 課題

- ①震災を風化させず、被災者の思いを分かちあい、共感していく継続的な活動。

キャリア教育	ねらい	命③ 生きることの希望・夢・たくましさ どんなつらいことや苦しいことにも負けず、希望と夢をもち、たくましく生きていく強い意志と態度を養う。
【題材】 <ul style="list-style-type: none"> ○気仙沼（被災地）バス見学の実施 ○被災者を招待した運動会の実施 ○水山養殖場（気仙沼）での牡蠣養殖の体験学習 ○PTA講演会（国連表彰の畠山重篤さん）の開催 ○教科学習（社会科での「気仙沼の水産業」、「理科での地震発生の仕組み」） ○学習発表会での創作劇の発表（畠山重篤氏、藤原清衡） 		
【対象】 全校児童（102名）		
【復興教育の視点】 <ul style="list-style-type: none"> (1) 【人づくり】郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育てる。 (2) 【体験から学ぶ】震災津波と向き合い、この体験そのものを「教材」とし、生きる力を育む。 		
【実践の概要】 <ul style="list-style-type: none"> (1) 気仙沼（被災地）バス見学の実施（5月9日、3～6年生） 自分の目で見て被災者の方の生の声を聞くために、3～6年生は被災地である気仙沼見学を実施した。 (2) 被災者を招待した運動会の開催（5月26日、全校児童、保護者、地区民） 室根町にある仮設住宅にいる前自治会長さんを招き、一緒に運動会を楽しんだ。 (3) 水山養殖場（気仙沼）での牡蠣養殖の体験学習の実施（6月26日、5・6年生） 5年生が気仙沼での牡蠣の養殖場である水山養殖場を訪れ、被災の様子を見学すると共に復興を遂げた養殖場と海上のイカダで体験学習を行った。 (4) PTA講演会の開催（6月29日、4年生、保護者、地区民 約120名） 「森は海の恋人」理事長であり、今回国連フォレストヒーロー賞を受賞された畠山重篤さんを招き、「苦難を乗り越える力」と題して、壊滅的な被害を被った養殖場を見事に復活させた強靱な魂とふるさとへの愛に満ちた生き方を学んだ。 (5) 教科学習での学び（6月、10月、5年生） 5年生の社会科では、「水産業のさかんな地域」で気仙沼の水産業を取り上げ、現在の水産業の復興の現状を学んだ。また、6年生の理科では、「土地のつくりと変化」で地震による土地の変化について学んだ。 (6) 学習発表会や「絆街道の灯り事業交流会」での地域への発信（10月20日、全校児童、保護者、地区民、約200名、400名（絆街道の灯り事業交流会）） 5年生は、総合的な学習で課題解決学習を行ってきた水山養殖場の復活と畠山重篤さんのたくましい生き方を主題として、教師と児童で脚本化し、「海・希望」という題で演じた。また、6年生は、平安時代に東北の自立を成し遂げ、浄土思想をもとに一大仏教文化を築き上げた藤原清衡を題材としてとりあげ、地区民や仮設の方々を前に劇化して演じた。 		
【実践の詳細】 <ul style="list-style-type: none"> (1) 気仙沼（被災地）見学の実施（5月9日、3～6年生） 昨年度は気仙沼市本吉町から学区に避難されてきた被災者の方々に対する支援を復興教育として行ってきた。今年度は、児童の繊細な内面に配慮しながらも、体験活動を通して、児童に感じ、考えさせることをスタートとし、ゴールとしての表現活動を明確化していくことで復興教育をスタートした。気仙沼のバス見学に際しては、事前に4月に教職員全員で気仙沼の被災地や魚市場を視察し、児童にとってどの程度の内容が見学として可能なのかを探った。保護者への説明や、担任による児童の心の状況調査を経ての実施となった。魚市場ではボランティアガイドの方から被災の説明を受けながら見学を行い、冷凍マグロの水揚げや、かさ上げし鉄板を敷き詰めた状態での市場の再開の様子を学んだ。共徳丸の前での黙祷の後、復興商店街では支援としての買い物を行った。最後に、これから支援・交流を開始する地元室根町の仮設住宅をバスから見学した。 		
		【打ち上げられた共徳丸の前で黙祷する子ども達】
		【市場でのガイドさんからの説明】 【気仙沼復興商店街での買い物】

【児童の感想】

日本は地震が多い国です。その地震から身を守るためには、大きな地震が来て津波がありそうな時は、建物の屋上や高いところに逃げるのです。気仙沼のガイドさんたちはそうしました。さすがだなと思いました。気仙沼見学をしてぼくはこう思いました。被災した人のために何が出来るかを。気仙沼の人達は、3月11日に東日本大震災が起きてもくじけませんでした。ぼくも大人になって、大きな地震がきて、気仙沼の人のようにその地域が津波でやられても、くじけないようにがんばりたいです。(6年男)

(2) 水山養殖場での体験学習の実施(6月、5・6年生)

震災の爪跡を未だ残しながらも見事に復活をとげた気仙沼の水山養殖場を訪れ、震災当時の様子を伺うと共に体験学習を行った。児童はカニつり体験や船上での牡蠣の試食を通して、養殖業者の牡蠣栽培にかける熱意や力強い復興の様子を目の当たりにした。震災で船とイカダを流され、加工場が壊滅し、約2億円の損害を受け、漁師仲間も地元を離れる中で、どのようにして苦難を乗り越えたか、そのふるさとを思う心と強靱な魂を学んだ。子ども達は、東京築地で高額で取引される牡蠣をほおぼりながら漁師達の情熱を感じ取った。



【船上で牡蠣の原盤を見学する子ども達】

(3) 教科学習での学び(6月、5年生)

5年生の社会科では、「水産業のさかんな地域」で気仙沼の水産業を学習材として取り上げ、震災前と震災後の市場と水産業の様子について学習した。カツオやマグロ、フカヒレ等で日本一の水揚げ量を誇る気仙沼の漁港は、震災で壊滅的な被害を受けた。児童は、教科書関連の教材会社で編集された水産業の現状の動画等から、魚市場に冷凍設備が無いことで市場の復旧がかなり遅れていることを知った。また、多くの被害を被った中でも、漁協や漁師達の熱意ある努力により市場は見事再開を果たし、魚の水揚げ量も徐々に増えてきていることを学んだ。



【気仙沼の水産業の様子を学ぶ子ども達】

(4) 学習発表会での地域への発信(10月、5・6年生)

5年生は復興劇(海 希望)の主題を「東日本大震災で最愛の母と仕事を失いつつも、希望をもって苦難を乗り越える家族」とし、主人公である畠山重篤さんの葛藤とふるさと舞根を思う心情を創作劇として保護者や地区民に披露した。この復興劇の感動の輪は広がり、一関市と気仙沼市合同の復興支援事業「絆街道の灯り事業交流会」にも出演し、気仙沼市民や被災者の方々に感動と勇気を与えた。また、6年生は東北に自立と平和をもたらした藤原清衡を題材として、戦乱の世をたくましく生き抜く清衡の姿に学び、創作劇として堂々と演じた。学習発表会当日は地区民や仮設住宅の方々に招待し参観して頂いた。その後、PTAによる地元室根の特産物や昼食のふるまいがなされ、大変喜ばれた。



【創作劇『藤原清衡』(6年)】

【保護者の感想】

6年生の劇は地元の世界遺産を劇にすることで、観る側、演じる側で歴史を良く知ることができました。清衡の生き方や歴史に更に興味をもちました。一人一人の体当たりで一生懸命な演技、素晴らしかったし感動しました。係りの仕事を何役もこなし、演技も上手くととても頼もしく成長したなあと感じました。

【仮設住宅の方々の感想】

素晴らしい劇でした。すごかったです。涙が出ました。震災を思い出しました。ありがとうございます。一生懸命な演技に感動しました。室根の人達は気持ちが良い、いいところだと思っています。学習発表会に来て本当によかったです。

【まとめ】

(1) 成果

- ① 学習のスタートであった被災地見学からゴールの学習発表会での創作劇の発表までの一連の課題解決学習により、児童の思いや考えを基盤とした学習が展開でき、夢や希望、たくましく生きていこうとする意志や態度を養うことができた。
- ② 本校の復興教育の3つの柱である「教訓を生かす」「たくましく生き抜く力、助け合う力を育てる」「震災を語り継ぎ、風化させない」が具体的な実践を通して充実した。

(2) 課題

- ① 今年度の成果と課題を明確にした上での次年度以降の継続した取組。

<p>自然災害について 「お話を聞く会」 による啓発活動</p>	<p>ね ら い</p>	<p>①東日本大震災を実際に体験した方からお話を聞くことによって、震災の状況をより現実的なものとして受け止めさせ、復興に向けてより主体的に生活していこうとする態度を育てる。 ②「川による水害」という身近な危険に目を向けさせることで、自然災害の恐ろしさを理解させ、防災に対する意識を高める。</p>
<p>【題材】岩手の復興教育講演会～大震災の経験から学び、「自分の体は自分で守る」ための知識と心を育てる。</p>		
<p>1. 「きずなと未来～東日本大震災の記録」</p>		
<p>2. 「川について」</p>		
<p>【対象】児童 教職員 保護者</p>		
<p>【実践の概要】</p>		
<p>1. 「きずなと未来～東日本大震災の記録」 講師 大船渡市立大船渡小学校 柏崎 正明 校長先生</p>		
<p>9月12日(水)に、大船渡小学校の柏崎正明校長先生をお招きし、標記の演題で講演会を行った。</p>		
<p>以下は、講演内容を要約したものである。</p>		
<p>*被災直後のこと</p> <p>当時は268名の児童が学校にいた。国道45号線の方からバキバキと音がし、土煙が上がっているのが見えたので、海側の校門は避け、裏のフェンスを最後の児童が乗り越えた直後に、2mの波が校庭に押し寄せた。間一髪だった。1階と2階は浸水し、泥だらけとなった。保健室のベッドはひっくり返り、石でできた校門はなぎ倒されてしまった。学校(海拔11m)から大船渡中学校(70m)に避難した。</p>		
<p>*避難1日目</p> <p>その後迎えにきた家の人に児童を引き渡し、16時55分の時点で101名の児童が残っていた。18時10分には49名となったが、この日は中学校に泊まった。先生方も21人泊まった。とても寒い日だったので、何人ずつかで円形に集まり、足をくっつけて寝た。数名の先生が学校の保健室に戻り、毛布を持ってきて何とか寒さをしのいだ。</p>		
<p>*避難2日目</p> <p>午前には児童は17名まで減った。迎えにきた子は親と抱き合って喜んでいる。13時に全員の引き取りが完了した。教育委員会から安否確認の報告を求められたので、男の先生が各避難所に児童の所在の確認に向かった。</p>		
<p>*避難3日目</p> <p>安否確認は、あと1人を残すのみとなった。</p>		
<p>*避難4日目</p> <p>最後の1人が親戚宅にいるのが判明した。これで全員の無事が確認され、先生たちは大きな拍手をして喜んだ。</p>		
<p>その他にも、「卒業生がPTA副会長をしている東京の小学校から、ランドセルが500個届いた」「3つの子供会が全壊地区にあったため、合同でお正月遊びをした」「1mも地盤が沈下した。9月になってやっと信号が復旧した」といった被災地状況の説明があった。また、当時1年生だった児童が2年生になってから書いた作文も紹介していただいたが、非常に胸を打つものがあり、子どもたちの心にも深くしみいついていたようであった。講演は、次の言葉で終了した。</p>		
<p>「大切な命は自分で守る。」そのためにも真剣に避難訓練をしてください。大船渡小学校の児童には、「今回たくさんの人たちからもらったやさしさをとっておいて、いつかそのやさしさをお返しできる心やさしい人になってください」と話しています。</p>		
<p>講演は、被災地の状況を如実に物語る多くの写真や、大船渡小学校を取り上げた新聞記事を使って効果的に行われた。大震災後約1年半の年月を経て、改めて自然への畏敬の念と命の尊さ、絆の大切さを確認するよい機会となった。</p>		

2. 「川について」 講師 一関防災センター 北上川学習交流館 事務局長 齋藤 一公 氏

8月23日(木)に、身近な自然災害について理解するために、川による水害についての講演会を行った。

以下は、講演内容を要約したものである。

* 「なぜ、今は川で遊んではいけないのか」

- ・昔は川で遊んでいても、それを見ている大人(農作業中の人、通行人等)が近くいた。今は、堤防が高くて川の様子を見ることができない。また、昔と違ってだいぶ汚くなってきている。遠浅の海と違って、川は急に揺れて深くなっている。
- ・最近は何リ豪雨といって、1時間で1mも水位が上がるような雨が降る。本寺地区では、時間雨量 98mm を記録している。
- ・最近、大きな川よりも太田川や衣川などの比較的小さな川が危険だと考えられている。

* 「北上川はどんな川か」

- ・北上川の全長は249kmだが、狐禅寺から石巻までの勾配が5000分の1しかない。つまりほとんど平らで、しかも川の両側が狭いところがあるので、一関から平泉かけての地域で洪水を防ぐには、遊水池を作るしか方法がなかった。

* 「北上川と平泉の関わり」

- ・平泉は、北上川の水運のおかげで栄えることができた。柳之御所跡の上に、バイパスが通る予定であったが、遺跡保全のため100mほどルートを変更した。全国でも例のないことであった。昭和22年と23年には、カサリン台風とアイオン台風による洪水で大きな被害を受けた。平成14年には、平泉中学校の校庭が水没してしまったこともあった。

* 「災害にあったとき、どうすればよいか」

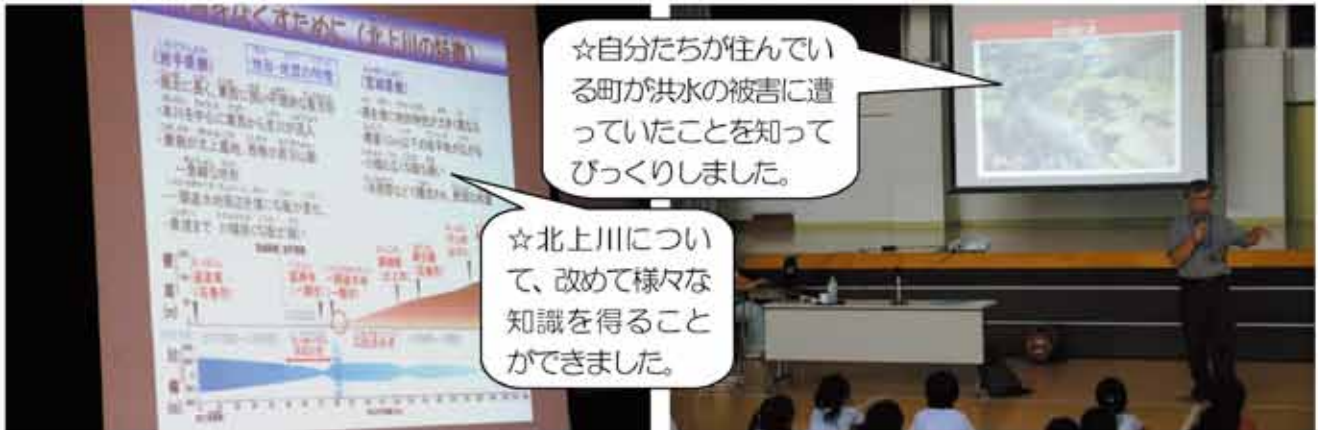
- ・一人一人の「生きようとする気持ち」が大切。そういう人が助かっている。
- ・自分の命は自分で守ることだ。それができる人は他の人の命も助けることができる。
- ・「津波でんでんこ」という言葉がある。逃げたらその後、どこに行って(待って)いるということまで家族で決めておいてほしい。

* 「川の深みにはまったときは、どうしたらよいか」

- ・慌ててばたばたしない方がよい。体が硬直してしまう。プールと同じで、すぐに浮くから、それまで待つ。後は流れに任せる。浅瀬にいたり、遠い上がるものが近くに来たりするので、それを待つつもりでいることだ。無理に立とうとすると、テラポッドに挟まったりしてかえって危険だ。

* 児童の感想

- ・川や水、洪水のことがよくわかりました。水をあなどってはいけないと思いました。今日は、川の危険について大切な話をさせていただき、本当にありがとうございました。



☆自分たちが住んでいる町が洪水の被害に遭っていたことを知ってびっくりしました。

☆北上川について、改めて様々な知識を得ることができました。

【2つの講演会から】

これらの講演会から得たことの多くは、すでにテレビ等で見聞きしていたことであつたかもしれないが、東日本大震災を実際に体験した被災者や、川の性質を熟知する専門家から直接話を聞くことができたことで、子どもたちに心により現実味を帯びた課題として、深く焼き付けることができたのではないかなと思う。

また、川の性質について詳しく知ることで、「平泉も、またいつ洪水等の自然災害に見舞われるかわからない」という危機感をもった児童も多かったようである。自然災害に対して備える意識を着実に育てていくためにも、この2つの講演会で学んだことを、これからも機会を見て想起させ、教科指導の中にも適宜生かしていくことが大切であると実感した。

これからも、マスメディアからの情報収集だけでなく、人と人とのつながりの中から得る情報や知識、そして心と心の交流を通して、復興に向けて災害への備えを怠らない、より実践的な生活への志向を目指していきたいと考える。

東日本大震災の体験を風化させないための活動	ね ら い ①被災地の現状と復興に向けての課題を知り、復興に向けて絆をより強固なものとする。 ②内陸部にあつて、やや薄れがちとなった震災体験を風化させることなく、後世に語り継ぐための活動に取り組むことで、復興に主体的に臨む姿勢を育む。
-----------------------	---

題材1 震災の体験を風化させないための体験文集づくり「伝えよう 東日本大震災」

【対象】児童 保護者 教職員

【実践の概要】

平泉町は、今回の大震災ではライフラインの寸断に加えて、家屋の損傷等が多数あり、内陸部としては被害状況がやや甚大な地域であった。しかし、月日を経るにつれて、そのときの大変な思いや、被災地を思いやる気持ちが徐々にではあるが薄れてきている状況は否めない。今年度復興教育推進校の指定を受け、そのような状況に危機感をもち、「震災の体験を語り継ぐことは、残された者の責務である」という使命感のもとに、体験文集作りに取り組むことになった。

夏休み前に、文集作りの趣旨を保護者に伝え、協力を依頼したところ、児童 170 名（全校児童数 309 人）、保護者 79 名から原稿の提出があった。これに教職員 4 名の原稿を加え、計 253 名による文集となった。9 月、10 月のパソコンへの打ち込み作業と、11 月の校正作業を経て、12 月中旬に文集は完成し、終業式の日には全家庭に配布する予定である。

なお、保護者には次のような内容で協力を依頼した。

原稿依頼の対象

- ① 3 年生以上の児童全員（難しい状況がある場合はご相談ください）
 - ② 1、2 年生で希望する児童
 - ③ ご協力いただける保護者の皆様
- 400 字原稿用紙で 1 枚程度の内容



☆151 ページの文集が完成しました。表紙の題字は、校長先生に書いていただきました。

この中には、肉親を津波で失った方が当時の様子を丁寧に書き綴ってくださった原稿もあり、胸に熱いものを感じながらの打ち込み作業となった。子どもたちが綴った内容も、ライフラインが寸断された中での不便な生活を振り返りつつも、「今の当たり前生活に感謝し、あるものを大切にしながら生活していきたい」と決意する内容がほとんどであった。これらの思いが活字となって残ったことで、今後も震災を振り返る機会が少しでも増えることを期待したい。

題材2 防災・復興支援コーナーの設置

多目的ホールの一角に防災・復興コーナーを設け、防災に関する書籍や、復興に関する新聞記事等を展示している。ラックは用務員さんの手作りで、子どもたちの興味をもってもらえるよう適宜情報更新に努めている。

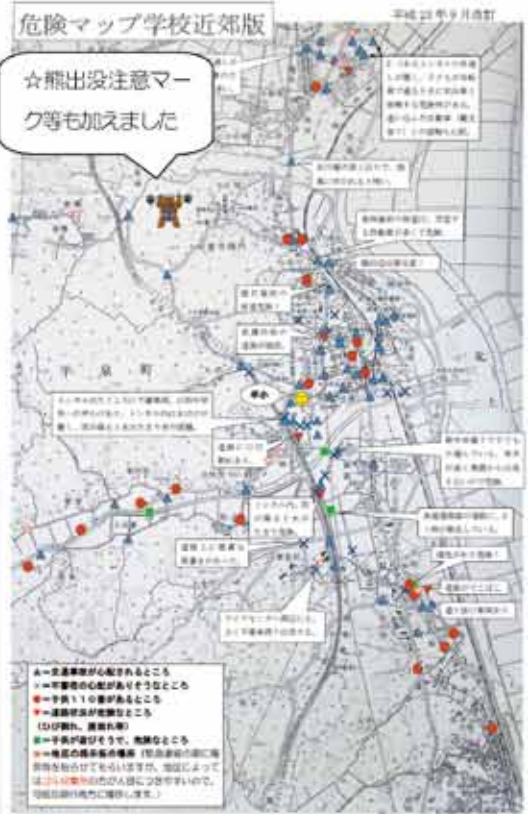
また、職員室前廊下には、子どもたちが震災当時に被災地とどう関わりをもったのかということをお忘れするように、支援活動の記録を掲示している。平泉が世界遺産に登録された昨年の 6 月以降、本校にも様々な支援の申し出があり、実際の被災地支援に支障がないものについては基本的に受け入れてきている。それらの中には、海外からの励ましのメッセージや、平泉を訪れた愛知県の「天池いきいき会」から直接いただいた色紙などがあり、被災地の復興を願う世界中の人たちの思いを子どもたちに伝えるために、すべて廊下等に掲示している。



題材3 学区内危険マップの改訂

東日本大震災の発生に伴い、本校の学区内にも、道路にひびが入ったり、路肩が崩落したりするなどの被害があった。そこでPTAの協力を得て、昨年度の7月に学区内危険箇所の点検を実施し、平成20年度に作成した学区危険マップの改訂作業を行った。「不審者が出没しそうなどころ・交通事故が多いところ・遊ぶには危険なところ」等を子どもでもわかるように記号で記入し、新たに子ども110番の家や地域の掲示板（電話等が通じないときの連絡に活用）の情報も入れて、昨年度の9月に全家庭に配布（全学区版と近郊版の2部）した。

また、今年の10月には子どもたちが日常的に危険な場所を意識して生活するようにと願い、その拡大版を廊下に掲示し、子どもからの情報提供も促している。日常に潜む危険に常に注意を払いながら行動する姿勢を身につけさせることで、「自分の体は自分で守る」態度の育成を願うものである。



題材4 教育課程に関連づけた復興・安全教育の推進

復興・安全教育は、日常的な教育活動と連動して行うことが効果的であり、より実践を促すことにつながるものと考え、教務主任を中心に教育課程との関連づけ作業を行った。本年度10月末時点での本校の主な実践は、以下の通りである。

1年	○国語「手紙」→被災地の方に、元気になるように手紙を書いて送る。
2年	○生活科「町はたからばこ」 →働く人など多くの人とふれあうようにする。・自然の生き物とふれあい、生命の大切さを学ぶ。
3年	○総合的な学習「平泉のじまんさがし」→地域の良さに気づき、大切にしようとする。 ○社会「地域を知る」→校外学習で実際に見て、触って、体験して、発見する。 ○道徳「ヌチヌグスージ いのちのまつり」(生命尊重) 「やさしい人大作戦」(思いやり・親切) →道徳ノートを活用し、自分をふりかえり、自分の思いを書き込ませる。
4年	○総合的な学習「地域のまつり」「福祉施設の訪問」→地域のために活動している人や、お年寄りの方と実際に交流することで、その思いに触れ、よりよい生き方について考える。 ○社会「水害をふせぐ」→副読本を活用し、平泉を襲った水害の写真などから被害の実態を理解する。 「安全なくらしとまちづくり」→自分たちが調べたことを、地域安全マップにまとめてみる。
5年	○国語「百年後のふるさとを守る」→復興の進むべき方向性について、自分なりの考えを持たせる。 ○理科「台風の被害」→北上川の洪水による過去の被害を知り、遊水池の役割について考えさせる。 ○社会「自然災害の防止」→講演会で学んだことを生かし、防災について積極的に考え行動する姿勢を育む。
6年	○総合的な学習「古都ふるさと平泉」「平泉のためにできること」 →地域の実態を調べ、自分たちができることを計画し実践する。地域の人材を活用し、地域との交流を図る。

【まとめ】これらの一連の活動を通して、子どもたちには「自分の体は自分で守る」という意識が着実に育ってきていると実感している。今年度初めて予告なしで行った避難訓練では、今までにない真剣な態度で臨む児童の姿を見ることができた。また、総合的な学習等の活動を通して「地域をより深く知り、郷土への愛着をもつ」ことで、復興への歩みがさらに進んでいくことも実感できた。今年度取り組んだことの成果と課題をきちんと整理し、これからも継続していけるよう、保護者や地域との連携を深めながら、長い目で復興教育の推進に努めていきたい。

防災教育	ね	1 自然災害について、発生のメカニズムや歴史と対策を理解させる。
	ら	2 災害発生時に身を守る方法や応急処理、サバイバル技能を身に付けさせる。
	い	3 命を尊重する心、他者を思いやる心を育てる。
		4 郷土を愛し、その復興・発展について主体的に考える人材を育てる。

【題材】 防災教育

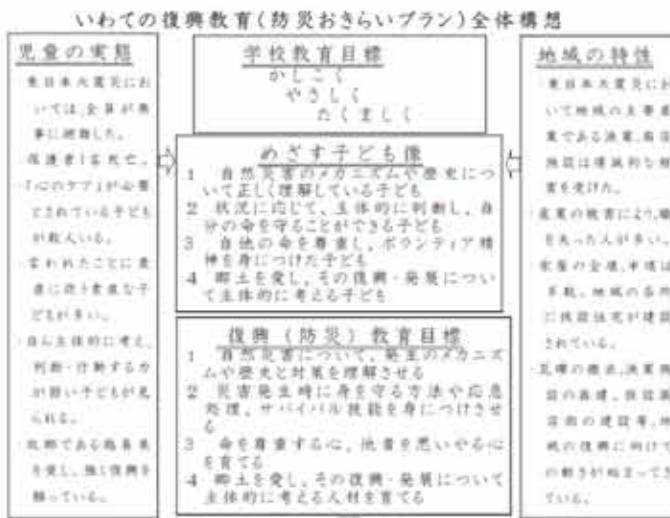
【対象】 全校児童

【復興教育の視点】

- ◇状況に応じて、自分の命を守るために適切に行動できる思考力、判断力、行動力を身に付ける。
- ◇全国から受けた支援に感謝する心、自分も人のためにできることをやろうとする心を育てる。
- ◇震災の体験から学んだことを他の地域や未来に語り継ぐ。

【実践の概要】 <資料1 全体構想図>

【実践の詳細】 <資料2 年間計画>



「防災おきらいプラン」カリキュラム・年間計画

月	防災教育推進計画	1-2年	3-4年	5-6年
4	防災教育推進計画、学校防災訓練実施、卒業生訪問、防災避難訓練、防災教育推進計画	第1: 防災からの避難 第2: コの防災	第1: 防災からの避難 第2: コの防災	第1: 防災からの避難 第2: コの防災 第3: 防災教育(3年)
5	東日本大震災復興推進計画、防災教育推進計画	第1行1: 東日本大震災からの避難 第2: 防災教育(3年)	第1行1: 東日本大震災からの避難 第2: 防災教育(3年)	第1行1: 東日本大震災からの避難 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)
6		第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)
7	防災教育推進計画	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)
8	防災教育推進計画	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)
9	防災教育推進計画	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)
10	防災教育推進計画(避難訓練)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)
11	防災教育推進計画	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)
12	防災教育推進計画	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)
1	防災教育推進計画	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)
2	防災教育推進計画	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)
3	防災教育推進計画	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)	第1: 防災教育(3年) 第2: 防災教育(3年) 第3: 防災教育(3年)



<下校時避難訓練の様子>

県教委の復興プログラムを受けて、全体構想(資料1)を作成し、「防災おきらいプラン」を作成した。プランには年間指導計画(資料2)に単位時間毎の指導案、資料等も含む。内容は「災害の理解」「防災リテラシー」「ひとづくり」の3領域から成り、地震・津波だけでなく子どもたちが遭遇する可能性のある災害全般を対象とした。

プランの実践においては、最大のねらいである「状況に応じて、自分の命を守るために適切に行動できる思考力、判断力、行動力」を身に付けさせるために、「そのときどうする?」と問いかけ子どもたちに考えさせる場を設けるようにした。また、防災は学校単独で成り立つことではないので、学校で実践した内容を保護者や地域に知らせてご意見をいただくことや関連機関(町内会、消防団、消防署、警察、市の防災課、教育委員会、防災科学技術研究所等)と連携することを意識した。

【授業の展開】 防災おきらいプラン No.16 「防災マップづくり」

1 指導計画と活動の様子

(1) 災害時の避難対応を学ぶ



学校周辺の大きな地図を、みんなでつくって、すぐ逃げる高台、避難路、しばらく避難できる安全な施設など、避難対応に必要な場所や周辺の危険を整理する。

(2) まちあるきで地域を確認する



整理した避難に必要な場所や周辺の危険について、まちを歩いて確認する。地図から位置を確認し、写真を撮り、シートに状況・理由を記入する。

<資料3 防災マップ指導計画>

日時	内容
11月20日 09:40～12:00	(1) 災害時の避難対応を学ぶ ◆ステップ1 ①災害の危険と避難、②ジグソー防災マップづくり ◆ステップ2 ③地域の災害危険 ◆ステップ3 ④避難対応リストづくり
11月20日 13:40～16:00	(2) まちあるきで地域を確認する ◆ステップ4 ⑤まちあるきのやり方 ⑥まちあるき準備 ⑦地域へ移動 ⑧まちあるき
11月21日 09:40～11:35	(3) 防災マップをつくる ◆ステップ5 ⑨まちあるき記録整理 ⑩防災マップづくり ⑪発表
12月07日 14:25～16:00	(4) 地域で共有する ◆ステップ6 ⑫防災マップ発表会

(3) 防災マップをつくる



①グループ別に大きな地図に記録し防災マップをつくって、みんなで発表して共有する。

②子どもが作成した防災マップと具体的な高台

と危険について、地域の方々に発表・提案する。行政の防災担当や保護者、地域の方から意見・助言をいただく。

2 保護者、地域の感想

・防災マップ作り、大変だったと思います。安全に避難しなければ意味のない事。それなのに、避難路が意外にも危険がある。このように課題が多い分、みんなでいろいろ案が出て、みんなで考え、本当に「自分たちに必要なマップ」「町に必要なマップ」が作れたと思います。(3年母)

・私たちが小学生の頃は、このような取組がありませんでした。震災があったからとは言え、これからここで生活していく中で避けては通れないことです。我々消防団も、津波に対し子供たちが心構えをもつことは素晴らしいことだと思います。今だけではなく、長く続けて行って子供たちが後世に語り部として伝えていくためにも頑張ってください。震災は忘れた頃にやってくるのではなく、震災は構えていれば大丈夫と思うようにしましょう。(消防団)

3 まとめ

<成果>

◇「そのときどうする？」と考えさせる指導を積み重ねたことにより、子どもたちに主体的に思考、判断し、行動する力が付いてきている。

◇学校で行った防災教育について保護者や地域に情報発信したことにより、保護者、地域や関連機関との連携が深まってきている。

<課題>

◇復興へ向けて日々変わる地域の現状に応じて「防災おきらいプラン」を見直していく必要がある。

道徳教育を通じて	ねらい	道徳教育を通じて、思いやりや人の痛みを感じる心や自ら考え主体的に行動する態度など、郷土を愛し、その復興・発展を支える礎を育む。																																			
【題材】 道徳教育 【対象】 全学年 全校児童数 164名 (H24.4.1現在) 【復興教育の視点】																																					
<p>本校は東日本大震災の影響で、校庭に10棟(60世帯)の応急仮設住宅が建ち並んでいる。また、学区の中学校が耐震制度の不具合で校舎を使用できず、小学校校舎の3階で学校生活を共にしている。さらに10月からは、災害復旧工事で体育館の部分改修工事が進められている。様々な制約・制限がまだまだ残る中、教育課程の完全実施はもとより、昨年度実施できなかった諸行事等の実施に向け、職員の英知を結集しつつ震災以前の学校教育活動に可能な限り近づけるよう創意工夫を加えながら学校運営に当たっている。こうした実態・実情から、何か新たに「復興教育」に向けてということではなく、これまで重点研究として取り組んできた道徳教育を実践していくことにより、上記のねらいを達成しようとするものである。</p>																																					
【実践の概要】																																					
<p>本校では、道徳的価値の自覚を深めるための書く活動を工夫すれば、児童の道徳性は高まり、心豊かでたくましい児童が育つであろうという仮説をたてて研究を進めてきた。</p>																																					
<p>書く活動の積み重ねにより、児童は、価値を捉え、自我関与させながら、書く活動に意欲的に取り組むことができるようになった。また、中心発問で書くことによって、価値についてより深く考え、自分の考えに自信をもって意欲的に発言しようとする姿につながってきた。従って、道徳授業に書く活動を位置付けて行うことは、児童の道徳的価値の自覚を深め、集団の道徳性を高めることに有効であると考えられる。</p>																																					
<p>今年度は、震災の体験を通して学んだことを重点項目とし、道徳的価値の自覚をより深めるための話し合いを重点に研究を進めてきた。また、地域の方をゲストティーチャーとして活用することを取り入れてきた。道徳の時間を核として、全教育活動を通して、ふるさとを愛し、その復興の担い手としての児童の育成をめざす。</p>																																					
【実践の詳細】																																					
◎ 主題に関わる基本的な捉え																																					
(1) 児童に育みたい豊かな心とは																																					
<ol style="list-style-type: none"> ① お互いのよさを認め合う相互理解の心、よりよく生活しようとする向上心 ② 相手の立場や気持ちを理解し、思いやりをもって行動しようとする優しさ ③ 美しいものや崇高なものに素直に感動する心 ④ 自他の生命を尊重する心 ⑤ みんなのために進んで働くことよさを実感できるような勤労観 																																					
(2) 道徳的価値の自覚を深める書く活動とは																																					
<ol style="list-style-type: none"> ① 価値を捉えて書く。 ② 自我関与させて書く。 ③ 主人公の心の弱さに共感して書く。 ④ 関連価値や反価値に気付いて書く。 																																					
(3) 道徳的価値の自覚を深める話し合いとは																																					
<ol style="list-style-type: none"> ① 国語科の「話す・聞く」をベースにして学び合うことにより価値に向かう意欲をもつ。 ② 書く活動を通して価値についてじっくりと考え自分の考えに自信をもって発言する。 ③ 自分の書いたものにとらわれず、友達発言を聞くことによって価値に対する考えをより深める。 ④ 友達の考えを聞くことで生まれる自己の思いの変容について意欲的に表現する。 ⑤ 児童個々の価値の自覚から、学級集団としてのよりよい価値意識へと高める。 																																					
◎ 本校では教師の説話の際、担任だけでなく、昨年度から校長・副校長を、今年度は身近な地域の方々を講師としてお招きし、価値項目に応じた貴重な経験談を中心に説話をさせていただいている。 下表参照																																					
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th colspan="4" style="text-align: center;">道徳授業の講師活用</th> </tr> <tr> <th colspan="4" style="text-align: center;">ゲストティーチャーによる説話の実践</th> </tr> <tr> <th style="width: 5%;">回数</th> <th style="width: 20%;">実施日</th> <th style="width: 15%;">実施学年</th> <th style="width: 60%;">内 容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="text-align: center;">1</td> <td style="text-align: center;">7月19日(木) 2校時</td> <td style="text-align: center;">3年</td> <td> 主題名 伝統を受け継ぐ 4-(5) 郷土愛 資料名 「祭りたいこ」 <重倉太鼓指導者 佐藤一男さん> 太鼓をたたいている5・6年生を見て、人?(挙手) 早くたたきたいと思う人?(生の3学期になると、5年生から教えてもらえます。それは、今まで2回続いている太鼓をたたいて、次の学年に引き継げるように持っています。 </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">2</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>			道徳授業の講師活用				ゲストティーチャーによる説話の実践				回数	実施日	実施学年	内 容	1	7月19日(木) 2校時	3年	主題名 伝統を受け継ぐ 4-(5) 郷土愛 資料名 「祭りたいこ」 <重倉太鼓指導者 佐藤一男さん> 太鼓をたたいている5・6年生を見て、人?(挙手) 早くたたきたいと思う人?(生の3学期になると、5年生から教えてもらえます。それは、今まで2回続いている太鼓をたたいて、次の学年に引き継げるように持っています。	2																		
道徳授業の講師活用																																					
ゲストティーチャーによる説話の実践																																					
回数	実施日	実施学年	内 容																																		
1	7月19日(木) 2校時	3年	主題名 伝統を受け継ぐ 4-(5) 郷土愛 資料名 「祭りたいこ」 <重倉太鼓指導者 佐藤一男さん> 太鼓をたたいている5・6年生を見て、人?(挙手) 早くたたきたいと思う人?(生の3学期になると、5年生から教えてもらえます。それは、今まで2回続いている太鼓をたたいて、次の学年に引き継げるように持っています。																																		
2																																					
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 10%;">学年</th> <th style="width: 20%;">主 題</th> <th style="width: 20%;">内 容 項 目</th> <th style="width: 20%;">資 料 名</th> <th style="width: 30%;">講 師</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>3年</td> <td>伝統を受け継ぐ</td> <td>4-(5) 郷土愛</td> <td>祭りたいこ</td> <td>太鼓指導者 佐藤一男氏</td> </tr> <tr> <td>1年</td> <td>世話になっている人</td> <td>2-(4) 尊敬感謝</td> <td>学校のようなむいんさん</td> <td>学校用務員 戸羽謙一氏</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>町の宝物</td> <td>4-(5) 郷土愛</td> <td>町の大きいちょう</td> <td>普門寺住職 熊谷光洋氏</td> </tr> <tr> <td>4年</td> <td>得意なことを伸ばそう</td> <td>1-(5) 個性伸張</td> <td>あこがれのアナウンサー</td> <td>ピアノ教室 千葉久美子氏</td> </tr> <tr> <td>3年</td> <td>身近な自然を大切に</td> <td>3-(2) 自然愛・動物愛護</td> <td>森がすき</td> <td>地域の方 吉田正子氏</td> </tr> <tr> <td>1年</td> <td>みんなが使う物</td> <td>4-(1) 規則尊重・公徳心</td> <td>きいろいベンチ</td> <td>公園管理人 佐藤 弘氏</td> </tr> </tbody> </table>			学年	主 題	内 容 項 目	資 料 名	講 師	3年	伝統を受け継ぐ	4-(5) 郷土愛	祭りたいこ	太鼓指導者 佐藤一男氏	1年	世話になっている人	2-(4) 尊敬感謝	学校のようなむいんさん	学校用務員 戸羽謙一氏	2年	町の宝物	4-(5) 郷土愛	町の大きいちょう	普門寺住職 熊谷光洋氏	4年	得意なことを伸ばそう	1-(5) 個性伸張	あこがれのアナウンサー	ピアノ教室 千葉久美子氏	3年	身近な自然を大切に	3-(2) 自然愛・動物愛護	森がすき	地域の方 吉田正子氏	1年	みんなが使う物	4-(1) 規則尊重・公徳心	きいろいベンチ	公園管理人 佐藤 弘氏
学年	主 題	内 容 項 目	資 料 名	講 師																																	
3年	伝統を受け継ぐ	4-(5) 郷土愛	祭りたいこ	太鼓指導者 佐藤一男氏																																	
1年	世話になっている人	2-(4) 尊敬感謝	学校のようなむいんさん	学校用務員 戸羽謙一氏																																	
2年	町の宝物	4-(5) 郷土愛	町の大きいちょう	普門寺住職 熊谷光洋氏																																	
4年	得意なことを伸ばそう	1-(5) 個性伸張	あこがれのアナウンサー	ピアノ教室 千葉久美子氏																																	
3年	身近な自然を大切に	3-(2) 自然愛・動物愛護	森がすき	地域の方 吉田正子氏																																	
1年	みんなが使う物	4-(1) 規則尊重・公徳心	きいろいベンチ	公園管理人 佐藤 弘氏																																	

【授業の展開】

- 1 主題名 「どこでやめるのか」 1-(1) 基本的な生活習慣
- 2 児童 第1学年児童 男子12名 女子19名 計31名
- 3 主題構成の理由
自分さえよければという自己中心的な考えを慎み、自分の思うままに行動するのではなく、深く考えて行動し、人の意見に耳を傾け、規則正しい生活をしようとする態度を育てていきたい。
- 4 本時のねらい
人の注意を聞き入れることの大切さを自覚し、わがままをしないで生活をしようとする心情を育てる。
- 5 本時の展開

段階	学習活動と主な発問	児童の反応
気づく	1 「わがまま」という言葉について知る。 ○「わがまま」という言葉を知っていますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・おやつを買ってくれなくて、弟と一緒にしつこくねだったことがある ・おもちゃを買ってくれない時、わがまますを言った 
深める	2 資料「かぼちゃのつる」の話を聞いて、かぼちゃの気持ちを話し合う。 ○つるをぐんぐん伸ばしているとき、かぼちゃはどんな気持ちだったでしょう。	
みつける	  <p>○はち、ちょう、すいか、いぬに注意されてもつるを伸ばし続けているとき、かぼちゃはどんな気持ちだったでしょう。</p> <p>◎トラックにつるを切られたとき、かぼちゃはどんなことを考えたでしょう。</p>	<p>つるの動作化中</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うれしいな ・楽しいな ・ぐにやぐにやずんずん伸びちゃえ ・もう一本先の道まですいかのところまで… ・もっといっぱい あっちまで… ・いい天気だなあ ・一人じめだ <ul style="list-style-type: none"> ・はみ出したっていいじゃん ・少しくらいいいじゃないか ・ここは俺のところだ ・ここは俺のもの 
つなげる	3 自分の生活を振り返り、わがまますを我慢した経験について話し合う。 ○かぼちゃのようにわがまますをしそうになったけれど、注意を聞いたり、しちやいけなと思ったりして、うまくいったことを話しましょう。	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなのいうことを聞いていればよかった ・ごめんなさいもうやりません ・伸ばすんじゃなかった ・えーん えーん 
つなげる	4 教師の説話を聞く。 ・昇降口の水道での水遊びについて 『や・り・す・ぎ・ない』	 <ul style="list-style-type: none"> ・水がなくなる ・水たまりになる ・外靴がびしょびしょにぬれる ・水たまりができて、石に引っかかって転ぶ ・びしょびしょになる ・すべりやすくなる

6 研究授業事後研のまとめ
 今年度第1回目、6月に行った1年生の提案授業でした。道徳授業の構築における共通理解を図ることをねらって行いました。入学して3ヶ月の子どもたちと、わがまますをしないで気持ちよく生活することの大切さについて、楽しくじっくりと考える授業ができました。
 ～ 第一学年担任・研究主任：遠藤 尚子 教諭 すこやかサポート：及川 美枝 講師 ～

<資料1> 道徳教育全体計画

◎ 本校教育目標及び道徳教育の重点目標に基づいた重点指導項目の吟味

全体計画は、評価し、改善の必要があればだちにそれに着手できる体制を整えておくことが大切である。また、全教師による一貫性のある道徳教育を推進するためには、校内の研修体制を充実させ全体計画の具体化や評価・改善に当たって必要となる事項についての理解を深める必要がある。



学年	指導の重点	各学年の重点内容	共通重点内容
低学年	<ul style="list-style-type: none"> 身近にいる幼い人やお年寄りの方に優しく接し、親切にする。 友達と仲良く活動し、助け合うことの大切さがわかる。 みんなが使うものを大切にし、約束を守る。 	親切 2- (2) 友情 2- (3) 規則尊重 4- (1)	基本的な生活習慣 1- (1) 希望・勇気 努力 1- (2) 自律 1- (3) 生命尊重 3- (1)
中学年	<ul style="list-style-type: none"> 自分で決めたこととことに積極的に取り組み、やり遂げる。 相手のことを考え、進んで親切にする。 友達のことを互いによく理解し、信頼し、助け合う。 約束やきまりを理解し守り、社会生活の中で守るべき公徳を大切にすること。 	親切 2- (2) 友情 2- (3) 規則尊重・公徳心 4- (1)	
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 自分のよい所を伸ばし、悪い所は改める。 だれに対しても思いやりの心もち、相手の立場に立って親切にする。 多くの人々の支え合いや助け合いで生きていることに対する感謝の気持ちをもち、自分ができることを実践する。 集団活動に積極的に参加し、自分の役割を自覚し責任を果たすとともに、主体的に協力する。 	個性伸長 1- (6) 親切 2- (2) 尊敬感謝 2- (5) 役割・責任 4- (3)	

<資料2>

◎ 学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の意識化

道徳教育 全体計画 道徳と教科等とのかかわり(1年生)

平成24年度

内容/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
主な学校行事	始業式 入学式 交通安全教室 身体・視力測定 避難訓練 家庭訪問 参観	運動会 避難訓練	プール清掃 プール開き 健康診断 修学旅行 避難訓練	青少年芸術鑑賞事業 宿泊研修 大掃除 終業式	始業式 作品・研究発表 会	プール納め 避難訓練 世代間交流 市陸上交差点 満足	しげく祭 マラソン大会 やきいも会	市内音楽会 避難訓練	学習参観 大掃除 終業式	
1年生にかかわる学校行事	入学式 交通安全教室 身体・視力測定 避難訓練 家庭訪問 参観	運動会 避難訓練	プール開き 健康診断 避難訓練	青少年芸術鑑賞事業 大掃除 終業式	始業式 作品・研究発表 会	プール納め 避難訓練 世代間交流 満足	しげく祭 マラソン大会 やきいも会	避難訓練	学習参観 大掃除 終業式	
道徳	たのしいがっこう 4- (4) 愛他心 いつでもどこでも 2- (1) 礼儀	おてつだい 4- (3) 愛他心 じやぎょうが はじまります 4- (1) 規則尊重・公徳心 パムの おかたづけ 1- (1) 基本的な生活習慣	わたしは もんしろう 3- (2) 自然愛・動物愛護 がんばれ ホイツ 1- (2) 動物愛護 ごろりん ごろん ころろろ 2- (2) 愛他心 いなりやまの こんたろう 2- (1) 礼儀	ぼくにまかせて ね 4- (2) 節制 かぼちやの つる 1- (1) 基本的な生活習慣 うちの きんぎょ 3- (2) 自然愛・動物愛護	がっこうの ようむしじゅきん 2- (4) 節制・感謝	うみがめの あかちゃん 3- (1) 生命尊重 よしみち 1- (3) 勇気 およげない りずさん 2- (3) 愛他心 はしの うえの おおかみ 2- (2) 節制	おつきさまが みている 3- (3) 尊厳心 おかあさんの つくった ぼうし 4- (3) 愛他心 きいろい ベンチ 4- (1) 規則尊重・公徳心 2- (3) 愛他心 たけとんぼづくり 2- (4) 節制・感謝	ひつじかいの いたずら 1- (4) 正義感・忍耐 すてきが いっぱい 4- (5) 節制 二わの ことり 2- (3) 愛他心 みみずくと おつきさま 1- (3) 勇気	ぼくにで と 2- (2) 愛他心 ひのよう 4- (3) 節制 いただき 3- (1) 生命尊重	
特活	学級活動	1年生になって 挨拶や 返事の仕方 1- (1) 基本的な生活習慣 安全な登下校 4- (1) 規則尊重・公徳心	上手に食べよう 運動会を 成功させよう 係を決めよう 1- (2) 動物愛護	健康な歯 1- (1) 基本的な生活習慣 雨の日の遊びを 考えよう 4- (1) 規則尊重・公徳心 プール使用の 決まりを知ろう	男の子、女の子 1学期の反省 もうすぐ夏休み 1- (1) 基本的な生活習慣	作品・研究発表 会	係を決めよう 1- (2) 動物愛護 世代間交流を 楽しもう 4- (3) 愛他心 遠足を楽しもう 2- (3) 愛他心	係の仕事や 頑張ろう 目を大切にしよう しげく祭を 成功させよう やきいも会を 楽しもう	ゲーム集いを 成功させよう 秋の読書を 楽しもう 手洗いとうがいを しっかりしよう 1- (1) 基本的な生活習慣	冬のおま を しよう 2- (3) 愛他心 2学期の もうすぐ
	クラブ・児童会・ 委員会	1年生を迎える 会 4- (4) 愛他心			七夕給食会 2- (3) 愛他心 地区子ども会		お月見給食会 2- (3) 愛他心	ゲーム集い 2- (3) 愛他心	地区子ど	
算数	国語	「あつたよ」 2- (3) 読解 「はきははのいっつ」 2- (1) 読解 「はながたてん」 4- (1) 公徳心・規則尊重	「あめですよ」 3- (2) 自然愛・動物愛護	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	
	算数	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解	「あやむら」 2- (3) 読解 「あやむら」 2- (3) 読解

<資料3> 年間指導計画

◎ 週1時間、年間35時間確実にを行う道徳の時間の指導の見通し

回	1	1	月	7	週	2
主題名	どこでやるのか			内容項目		1-(1) 基本的な生活習慣
資料名	かぼちゃの つる			出典		文溪堂
主題構成の理由	自分さえよければという自己中心的な考えを慎み、自分の思うままに行動するのではなく、深く考えて行動し、人の意見に耳を傾け、規則正しい生活をしようとする態度を育てていきたい。					
ねらい	人の注意を聞いて、わがままをしないで生活しようとする態度を育てる。					
展開の概要 主な発問	1 わがままな行動を取った経験について、発表し合う。 <input type="radio"/> 「我慢すること」はよいことか。 2 「かぼちゃの つる」を読んで話し合う。 <input type="radio"/> みんなに、道路や畑に伸びていってはいけなと言われてたかぼちゃは、どんなことを思ったか。 <input type="radio"/> 트랙のタイヤにつるを切られたとき、かぼちゃはどんな気持ちだったか。 ☆◎ぼろぼろ、ぼろぼろ、涙をこぼして泣きながら、かぼちゃは、どんなことを考えたか。 3 自分が人に注意されたときのことを振り返り、発表する。 <input type="radio"/> 自分たちの生活に生かせることはないか。 4 教師の説話を聞く。					
他の教育活動との関連	生活科「ときどきわくわく1ねんせい」			心のノート 関連ページ		P14～17

<資料4> 全学年道徳公開授業参観日の設定及び継続

◎ 開かれた学校づくりの一貫として「学校へ行こう期間」を設定し、保護者だけでなく広く地域の方々や児童委員、民生委員等、道徳公開授業への参加を呼びかけ実施している。

～ 保護者の感想から ～

【その1】

子どもたちの個性が表れていてとてもよかったです。2年生って、まだまだ考え方が果てしなくて、色々な表現の仕方ができるので楽しいですね。逆にその気持ちをこわさないようにするのが難しいんだなと思いました。震災を経験し、学校が大変なときに入学した子どもたちなので、家庭環境が落ち着かないときもあって、ちょっと心配でした。本当はゆっくり家庭学習や家での生活を安定させたいけれど、なかなか以前のようにいかずお互い通じないこともあります。今日の授業で習ったようにお友達のこと、ご近所の方に対する気持ちが人として常識的であれば安心です。よい授業でした。2年「どっち〜ぬくん」 友情 より

【その2】

3年生のみんなが、個性を生かすことについて意識していく過程を観ることができ、とても興味深い参観となりました。自分のよいところ、頑張っているところを探すのって実は大変なことなのかもしれません。〇〇も答えられず、帰ってから「〇〇のよいところってどこ？」と聞かれ、いっぱい答えたら嬉しそうな顔をしていました。自分が頑張っていると思えることが一つでもあるとそれが自信にもつながっていくと思います。そして、それが頑張りにもつながります。そういうことを学ぶ、とても大切な授業だったと思います。3年「リフティング百回」 個性伸長 より

【その3】

道徳ということで、一番苦手としている授業だったろうと思います。答えのないものに関しては、発言することにとっても臆病になるようです。ただ、自分の中ではおそらく家族というものに対していろいろと考えることはあったと思います。とてもいい機会を頂いたと感じました。親である私自身いつも怒ってばかりですが、生まれた日のことを思うと温かい気持ちにもなり子どもとの時間を大切に大切にしようと思えました。子どもに送ってある手紙を読んだとき、本人がどう感じてくれたのか… 恥ずかしがってなかなか口には出してくれませんが… 子ども自身が、毎日怒られていても、みんなに祝福されて生まれてきたのだと分かるいい授業でした。ありがとうございました。4年「ぼくの生まれた日 ドラえもん」 家族愛 より

ラグビーで元気を
発信しよう

- ・ラグビーを通して県内・県外の仲間と交流を深めよう
- ・学校・地域にむけて元気で前向きに進もうという意欲を発信するために全力でプレーしよう

【題材】ラグビーによる交流活動

【対象】小学校4～6年生

【復興教育の視点】

ラグビーを通して県内・県外の仲間と交流を深めるとともに、全力でプレーすることで学校・地域に向けて元気に前を向いて進もうという意欲を発信する。

【実践の概要】

1 「東日本復興支援・ラグビー
ラ・フランスキャンプ」への参加

(1) 期日：平成24年8月4日(土)～5日(日)

(2) 場所：岩手県紫波町
ラ・フランス温泉館・グラウンド

(3) 日程

- 1日目(8/4)
 - ・学校発 9:30
 - ・開会式 13:00
 - ・グループリーグ戦 14:00～
 - カップ・プレートトーナメント1回戦
 - ・アフターマッチファンクション
(交流会) 17:00～
 - ・花火、肝試し自由交流 19:00～
- 2日目(8/5)
 - ・ボウル・カップトーナメント開始 9:00～
 - ・決勝戦 11:00～
 - ・学校到着 15:00



2 「宮城県ラグビー BullsCup」への参加

(1) 期日：平成25年1月18日(金)
～19日(土)

(2) 場所：宮城県加美郡加美町
陶芸の里スポーツ公園

(3) 日程

- 1日目(1/18)
 - ・学校出発 13:00
 - ・陶芸の里到着 18:00
- 2日目(1/19)
 - ・Bulls Cup 参加 9:00～15:00
 - 開会式
 - 交流試合
 - 自由交流
 - 閉会式
 - ・学校到着 20:00



【実践の詳細】

・両大会への参加を通して、県内外のチームと交流試合を行うとともに、試合後のファンクションや自由交流の場面において、復興支援に対する感謝の思いを伝え、震災後の悪環境の中でも自分たちが元気にラグビーに取り組んでいる姿をアピールすることができた。

以下は大会の様子を報道した新聞記事及び参加した児童の作文である。



岩手日報 平成24年8月5日



ボールを追い掛け懸命にプレーする児童ら

ラグビー 友情育む

本県や宮城県と関東の児童が交流する東日本ラグビー交流会（県ラグビーフットボール協会など主催）は4、5の両日、紫波町小農家のラ・フランス温泉館の多目的グラウンドで開かれている。他県のチームと対戦したり、交流する機会をつくらうと初めて企画。沿岸部から参加した児童もあり、広いグラウンドで元気に汗を流しながら友情を育んだ。

紫波町

東日本の児童が交流 初の企画に170人参加

本県の児童約50人を含む15団体約170人が参加。子どもたちは「速く速く」「走れ」「速く速く」「走れ」などと声を掛け合いながらプレー。コート中を駆け回り、必死でボールを奪い合った。試合後は笑顔で握手を交わし、交流を深めた。

横浜市・豊岡小6年の河野峻君は「ちゃんと指示を出してプレーできた。いろんなチームが集まって対戦する機会は少ないので、仲良くなりた」と期待していた。

釜石市・小佐野小6年の葛西優斗君は、東日本大震災の影響で練習場に仮設住宅が建ち、思うように練習できなくなったといい、「いつもは体育館で練習しているけど、きょうは思い切り動ける」と喜んだ。

同交流会を企画した赤石小の佐藤剛教諭は「子どもたちが楽しそ

今回の試合はポウルトーナメントで2位（準優勝）を取ることができたのでよかったです。でも、基本のことができてなくて何度か注意されました。まだまだだと思ったので2学期は学校のクラブや朝練だけでなく自分で時間を見つけて基本の練習をしっかりとやっていきたいと思いました。

もう一つ大きな目的でもあった他のラグビーチームとの交流は、一緒の部屋になった七国スピリッツの人や茅ヶ崎ブルーフェニックスの人たちはもちろん、花火の時や肝試しの時に一緒になった子達とも仲よく交流できたのでよかったです。また他のラグビーチームとの交流会や練習試合があればいいなと思いました。

うにプレーしていて良
と見守った。
この機会に地
域のいろいろな人
東での開催を予定して
と触れ合っている。

他地域との交流 3・4年生	ね ら い ・他校の児童と交流し、お互いの学校や地域の素晴らしさに気付く。 ・国語の授業に言語活動を位置付け、思いを伝える力を育成する。
------------------	--

【題材】

- ・湯田小学校・沢内小学校との交流

【対象】

- ・湯田小学校、沢内小学校児童

【復興教育の視点】

- ・他校の児童と交流することで、地域や自校の素晴らしさに気付き大切に思う気持ちを育てる。



お互いの学校を訪問して交流

【実践の概要】

- ・湯田小学校、沢内小学校との手紙交流の実施。
- ・授業を通しての手紙指導。
- ・湯田小学校を招いての交流。
- ・湯田小学校、沢内小学校への訪問。
- ・全校での文集の作成と送付。
- ・湯田小学校と長縄の記録樹立を競う。
- ・スカイプカメラを活用しての交流。



郷土芸能について学習

【実践の詳細】

- 6月上旬 計画の立案
- 6月上旬 教務主任を中心に連絡調整の開始
- 6月19日 交流活動全体の児童への説明・保護者への通知
- 7月上旬 交流活動の開始、互いの写真の交換
- 7月20日 沢内小学校から手紙が届く
- 9月上旬 国語の授業を活用して手紙の作成（4年生）
- 11月7日 湯田小学校来校、交流（4年生）
- 11月12日 発表の準備（地域のよさをまとめる学習）
- 11月16日 郷土芸能学習会の実施（地域の方から）
- 11月16日 湯田町訪問について保護者へお知らせ
- 11月28日 湯田町への訪問（3年生）
- 11月15日 文集作りについての児童への説明
- 12月3日 全校文集作り開始
- 2月 スカイプを利用した遠隔交流の実施（予定）
- 2月 次年度の打ち合わせ（副校長）



交流校での発表の様子

【学習の展開】

1 (湯田小学校来校)

- ・日時) 11月7日(水) 13:00~14:30
- ・対象) 吉里吉里小学校4年生(26名)
湯田小学校4年生(18名)
- ・内容) ・迎える会
- ・2校での給食会食
- ・音楽発表とゲームの交流
(言葉集めゲーム・鬼ごっこ)
- ・支援の授与と感想



音楽発表での交流

2 (湯田小学校、沢内小学校への訪問)

- ・日時) 11月28日(水) 12:00~14:30
- ・対象) 3年生(15名)
- ・内容) ・交流会
- ・3校での給食会食
- ・湯田小学校、沢内小学校の自己紹介
- ・吉里吉里小の郷土芸能の調べ学習の発表
- ・わらび餅づくり
- ・湯田小学校、沢内小学校からの支援の授与と感想発表



わらびもち作り

【児童の感想(抜粋)】

- ・交流会では、吉里吉里の良いところの郷土芸能を発表したり、西和賀の良いところを発見したりすることができました。(吉里小3年)
- ・ぼくは、湯田小学校の皆さんにせいいっぱい感謝の気持ちをつたえることができました。いい交流会になったと思います。(吉里小4年)
- ・お別れのとき、わたしは悲しくて心がいっぱいになりました。でも、とてもいい思い出が出来て良かったです。機会があれば、また、みなさんと交流したいです。(吉里小4年)
- ・給食を食べたときに、話しかけてきてくれてうれしかったです。交流したときに、みなさんの「ありがとう」の歌声が心にのこりました。(吉里小4年)

【まとめ】

交流校に自分たちの地域について紹介するため、地域についての調べ学習を行ったり、他校と交流したりすることにより、自分たちの地域の良さに気付くとともに、他の地域の良さも知ることができた。

また、交流校からの心温まるお手紙や支援に、感謝の気持ちと生きる勇気を培うことができた。

さらに、手紙の指導を学習することにより、言語活動の工夫を加えた国語の授業展開をすることで、子ども相互の学習に関する関わりが増え授業が深まった。

移動距離が長いと、交流する時間が限られていたがお互いの気持ちが通じ合い心温まる交流だった。



湯田小学校からのお手紙

国語科 第5学年	ねらい 震災後に全国から届いた励ましのメッセージを読んで感じたことを詳しく知るためのインタビュー活動を通して、自分では気付かなかった感じ方・考え方に触れることで、友だちの内面的なよさや多様な感じ方・考え方に気づかせる。
-------------	--

宮古小学校の取組

平成23年3月11日の東日本大震災・大津波の体験を生かす

◎復興教育＝「ひとづくり」を「学習計画」へ位置づけ、ねらいの明確化・指導過程の工夫を図る

[各教科で防災学習の指導]・・・「津波災害」への関心の継続

[各教科のねらいの達成]・・・各教科の学習本来のねらいの達成

[生きる力の基礎を培う]・・・日常の授業で学び方を身に付けさせる

授業レベルの実践 各教科の学習で、震災に関する体験を生かした指導の工夫を行い、授業の充実を図る

重点教科 **低学年「体育科」**～心と体の一体化～ ①素早い動き ②ルールの徹底 ③楽しい活動 <意欲づくり>

中学年「社会科」～ふるさとの理解と愛情～ ①地形や地域を知る ②人や物を知る

③思いや願いを知る <仲間づくり>

高学年「国語科」～コミュニケーション能力～ ①関心を持ち続ける ②自分の考えをもつ

③話し合いができる <自分づくり>

【単元名】きくことについて考えよう

【教材】「きいて、きいて、きいてみよう」(光村図書)

【復興教育の視点】

・自然教室での「絆」の取組を契機に、震災からこれまでの生活を振り返り、一人ひとり今、新たに感じられることについて意見を述べ合う。

・題材として、昨年度総合的な学習の時間で活用した「姉妹校からのメッセージ等」を取り上げ、実際に県内・全国各地から寄せられた言葉から自分の考えを明確にもたせる。

《「いわての復興教育」の内容との関連》

絆⑧感謝 自分の成長や生活が、周囲の多くの人々の支えで成り立っていることに気づき、その人々の心情や行動に対して感謝の気持ちをもつことができるようにする。

【実践の概要】

総合的な学習の時間との関連を図り、本校の復興教育の視点を取り入れながら言語活動を工夫することで、より効果的に教科の目標を達成することができ、身に付けたい力が育つと考え、実践を進めた。

【実践の詳細】

メッセージを読み、相手の思いを考え、自分の考えをもつ

総合的な学習の
時間の活動

震災から1年以上経ち、仲間の大切さを考えられるようになってきた今の児童に、震災後におくっていただいたメッセージや物資にこめられた思いについて改めて考えさせた。一人ひとりが読んで感じたことや考えたことをまとめた。総合的な学習の時間と関連させて時間を確保し考える時間を十分にとり、メッセージに向かい合わせた。〈自分づくり① 関心を持ち続ける〉



心ひかれたメッセージについて、相手の思いや自分が感じたことをノートにまとめる

総合的な学習の時間



〈自分づくり② 自分の考えをもつ〉

国語科

総合的な学習の時間と並行して、国語科の学習で、インタビュー活動のしかたの学習を行う

本時の授業 震災のメッセージを題材にして、インタビュー活動をする

学習のねらい	身につけたい力
話し手の魅力を引き出すための、インタビューの仕方について学ぶ (メモの仕方、表情や話し方に気をつける) → 総合的な学習の時間に行う「自分たちの町をみつめ、宮古の将来について考える」学習で、地域で働いている人にインタビューする活動につなげる	コミュニケーションスキル (国語で獲得した力を他領域で生かす)
用意した質問→相手の答え→次に用意していた質問→相手の答え という形式的なインタビューでなく、その場で相手の答えに対して、もっと詳しく聞きたいところや、新たに出てきた疑問などを入れて、自分なりに質問の構成を変えていくことを目指す 〈自分づくり③ 話し合いができる〉	相手を理解する力 相手に働きかける力
話し手には、聞いてもらえたこと・自分のことを肯定的にみてもらえたことに対するうれしさをださせ、聞く側の大切さをとらえさせる。 → 友だちの内面的なよさ・多様な話し方・考え方に気づくきっかけにする	相手を思いやる心

《 学習後の児童の感想 》



・インタビュー活動を通して、話し手の人からや思ったことを考えました。周りの人の気持ちを考えることについての勉強にもなったと思うので、これからも人の気持ちを考えながら、人に接していくようにしたいです。

・インタビュー活動を総合的な学習の時間と一緒にやってみて、震災についての感情が一人一人違っていましたが、でも、その中でみんな同じだと思うことができました。それは、ぼくたちを支援してくれてありがとうございますという言葉だと思います。

《 授業の成果と課題 》

○総合的な学習の時間と国語科の学習を関連させることにより、国語科におけるインタビュー活動の充実を図ることができた。

○復興教育の視点を取り入れることにより、友達の人からや考え方のよさに気づく児童が多く見られた。

●今後は、メッセージを文字におこした資料をもとに、継続してメッセージを授業に生かせるようにしていく必要がある。



社会科 第3学年	ね ら い	「買い物」を通して、買い物が販売者の一方的なものではなく、消費者の思いに応えるための工夫や努力があることや、地元の人々のつながり、他地域とのつながりがあることに気づかせる。
---------------------------	-------------	--

【単元名】見直そうわたしたちの買い物

【取り上げる店舗】スーパーマーケット（DORA）と魚菜市場

【復興教育の視点】

- ・「魚菜市場」の見学を学習に取り入れることで、地元の人々とのつながりや地域とのつながりを実感させる。
- ・自分の原点となる「ふるさと」への思いや地域の一員としての意識をもたせるために、3年生なりにできることを考えさせる。

《「いわての復興教育」の内容との関連》

絆⑥地域とのつながり 地域には様々な立場の人が共に生活していることや、自分の生活が地域社会とのかかわりの中で成り立っていることに気付き、地域の一員として積極的にかかわろうとする態度を養うこと。

社会⑱復興へのあゆみ 災害で被害を受けた交通網や産業、住宅やまちの復旧、復興の様子を調べ、災害に強いまちづくりについて理解できるようにすること。

（社会⑱経済への影響）

【実践の概要】

スーパーマーケットの学習のあと、学校の近くにある「魚菜市場」を取り上げ、見学を通してスーパーマーケットとのちがいやよさ、お店で働く人の工夫や努力に気づかせていく。

【実践の詳細】

授業者の本単元の学習を計画するにあたっての思いを指導案に記載



魚菜市場で働く人たちは何代かにわたり地元（魚菜市場）で商店を開き、地域を大切にしたいという思いを強くもっている人たちである。そして、宮古の人たちの暮らしを支え、宮古の活性化のために観光客を増やす努力をし、宮古のために力を尽くしてきた。子どもたちが地域のよさを知り、そこに住む人々の温かさを感じることが、大人になってもふるさとを大事にしたいという思いやふるさとに帰ってふるさとのために力を尽くしたいという思いをもつことにつながる。ふるさとはその場所だけではない。そこに人がいて、関わりがあって、初めて「ふるさと」と思える。子どもころ地域に育てられたという感覚をもたせた。地域の中で人と人との関わりが少なくなっている今、魚菜市場での人と人がふれあいながら買い物をすることができる様子を体験することは、子どもたちにとって意味のあることだと考える。

震災後、「ふるさとのために何かしたい」と動く人たちがたくさんいた。その思いがたくさんの命を救い、たくさんの人々を元気にした。また地域の絆によって励まし合いながら前に進もうとしている人もいる。みんなで復興に向けて歩んでいる。そんな大人の姿を知ることは、いつか自分もふるさとで力を尽くしたいという思いへとつながっていくであろう。

スーパーマーケットの学習のまとめから

スーパーマーケットの学習のまとめ

お客さんに迷惑がかからないように 喜んでもらえるように
 お客さんが買いやすいように お客さんの失礼にならないように

魚菜市場では、何も工夫していないの？

工夫がちがうんだよ

魚菜市場を見学して比べてみよう！

〈仲間づくり ①地域を知る〉

本時の目標 見学してきたことをもとに、魚菜市場の工夫やそこで働く人の思いや努力に気づくことができるようにする。

〈仲間づくり ②人を知る ③思いや願いを知る〉

☆ 見学でわかったことを発表する。

魚菜市場を見学して、どんなことを発見しましたか？

- ・さんまが売れている。 ・かごにお金を入れている
- ・お客さんの見えるところで魚を切っている。
- ・お客さんと話をしていた。・たくさん買ったひとにおまけしていた。
- ・宮古産のものが売っていた。



☆ わかったことをもとに魚菜市場の工夫や努力について話し合う。

魚菜市場にしかない、こんないいところについて話してみてください。

- ・おいしい。宮古産。 **宮古のものがたくさん**
- ・盛り上がるように、親しい感じで話している。 } **ふれあい**
- ・宮古弁で。 ・友だちのように話している。 }
- ・観光客にサービスしていた。 ・おすすめをしていた。



宮古を知ってもらおう

魚菜市場の人たちは、どんな気持ちで働いているのだろう。

- ・お客さんに喜んでもらいたい。
- ・また来てもらいたい。
- ・楽しんでもらいたい。宮古が元気になってもらいたい。

宮古を元気に！

☆ 魚菜市場がにぎわっているわけをまとめる。

- ・宮古の物がたくさん売っている。
- ・お客さんと絆を深めている。
- ・観光客やお客さんがまた来たいと思えるように頑張っている。

感想・これから自分たちができることは

- ・これから魚菜市場で買い物をしたい
- ・ぼくが買い物をすることが、役に立つ
- ・家族で買い物に行く
- ・魚菜市場のことをもっと知りたい
- ・買い物について、お店の人と話してみたい
- ・(自分の家が魚菜市場でお店をやっているの) いつも店にいて、わからなかったことがわかってよかった

授業の成果と課題



成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ・見学の視点が明確 ・地元を教材化することで、新たな気づきがあり、ふるさとを愛することを考えさせられた (地域の実態、児童の生活実態を反映した活動) 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料活用の仕方の工夫 ・児童の学び方 (予想の段階で、自分の考えをもたせ、書かせたい)

復興教育との関わり

○教科のねらいを達成することがゴールである。授業内容に「復興教育のフィルター」をかけていくイメージで。フィルターを通すことが、教科の学習を深めることになる。

- キャリア教育
- ボランティア教育
- 地域との交流

ねい

- ・ 自分たちが住んでいる地域の環境に目を向け、よりよい環境づくりをしていこうとする関心・意欲・態度を育てる。
- ・ 地域への感謝の気持ちを持ち、感謝の気持ちを表現しようとする態度を養う。

【復興教育の視点】

郷土山田町、岩手、社会に貢献しようとする未来の担い手の育成

～「人としての生き方、自らの在り方を考える態度」「自らを守り、他者を支えるために身に付けさせたい知識・技能」を教育内容の要件に据える「いわての復興教育」の視点を踏まえて～

今、子どもたちは、何ができるのか、何をしていかなければならないのか！
それは、地域を見つめること、そして、地域に感謝の気持ちを表すこと！

【題材】

全校児童による地域への発信！

まごころ銀行スペシャル！

【実践の概要】

地域を見つめ、地域に感謝する、地域との交流&地域環境美化活動の展開！

昨年度までは、「まごころ銀行」と題し、第3・4学年が「学校の花壇の整備や花の球根植えをして、心にまごころの花を咲かせよう。」というねらいのもとに、校内環境美化活動を行ってきた。今年度は、全校児童による縦割り班での活動として行っている。また、「まごころ銀行」の発展的活動として「まごころ銀行スペシャル」と題し、「地域との交流活動をとおして、自分たちが住んでいる地域の環境に目を向け、よりよい環境づくりをしていこう。地域への感謝の気持ちを持ち、感謝の気持ちを表現しよう。」というねらいを掲げ、地域との交流&地域環境美化活動を展開している。

＜まごころ銀行スペシャルパートⅠ 6月実施＞

- 活動内容
 - ・ 仮設住宅の方々との花苗植え交流
 - ・ 地域の清掃活動



まごころ銀行

＜まごころ銀行スペシャルパートⅡ 10月実施＞

- 活動内容
 - ・ 仮設住宅の方々とのゲームなどによる交流会
 - ・ 地域の清掃活動



地域の清掃活動

＜まごころ銀行スペシャルパートⅢ 2月実施＞

- 活動内容
 - ・ 地域の方々へ感謝を表す会

【実践の詳細】

<児童の主体的な活動
にするための工夫>

- ・教務主任が児童会代表委員会で児童へ提案し、内容について話し合う。
- ・縦割り班での活動とし、班長会や各班で活動の計画を話し合う。
- ・準備（出し物やプレゼント等）は、縦割り班の5・6年生のリードのもとに全員で行う。
- ・活動の成果と課題をふりかえり、次の活動や地域のためにしていくことなどをまとめる。



「よろしくお願いします。」
自分たちが作ったクッキー
を渡しています！



仮設住宅の方々に植え方の指導をいただきながら、楽しく花苗植えをしました！



ジャンケンで負けたら肩たたきをします。
（勝ったら質問ができます。）おじいさん
やおばあさんは、とっても気持ちよさそう
です！（勝っても肩たたきをしました！）

<一方的でなく双方向的な
活動にするための工夫>

- ・校長が仮設住宅の自治会長に活動の趣旨説明を行う。
- ・校長・教務主任と自治会長で、活動の内容等について協議する。
- ・活動後に、自治会長等に感想や要望をいただき活動の改善に生かす。



交流活動の後、ごみ拾いをしながら
学校に戻りました！



手作りのかぼちゃクッキーを丁寧に
オリジナルの袋に入れていきます！

- ◆みんなが笑顔になってくれたし、ぼくたちも笑顔になれたのでよかったです。きずながまたつながったと思います。またどんどんきずなをつなげていきたいです。（1年生）
- ◆仮設の方々とたくさん話ができ、仲良くなれてよかったです。かぼちゃクッキーを渡した時、「ありがとう。」と言われて嬉しかったです。肩たたきゲームをしている時、じゃんけんでも勝っても肩をたたいてあげる人がいたのでよかったですと思いました。これからも、交流、地域のごみ拾い、雪かきのお手伝いなどをしていきたいです。（6年生）

★先日は、6月に引き続きたくさんのお子どもたちの訪問ありがとうございます。せっかく来ていただいたのに少ない参加者で申し訳なく思います。私が担当している行政区はほとんどが60歳以上の高齢者で久しぶりに孫世代の皆さんとふれあうことができ、大変喜んでいました。集会所ではいろいろな行事がありますが、あんな笑顔は久しぶりに見た思いがします。子どもたちも小さな心に大変な思いをされたと思いますが、あの元気な声、笑顔が何よりの元気づけになっています。また、機会をつくり、訪問いただけたらと思っています。よろしくお願いいたします。かぼちゃクッキーおいしかったです。皆分作るのは大変だったでしょう。残りは集会所に来た人たちにあげました。とても喜んでいました。また、イラストや文を読ませていただきました。ありがとうございました。（仮設住宅行政区長）

【まとめ】

復興を目指す地域社会の中で、児童が地域に目を向け、自らかかわっていかようとする意欲・態度を育てるために、「地域との交流」「キャリア・ボランティア教育」の内容を盛り込み、「児童の主体的な活動」「地域との双方向的な活動」を重視した活動を展開した。この教育活動を展開する中で、被災地域の中の学校が果たす役割の一つを確認できたことが成果として挙げられる。今後の課題として、年間を見据えた活動内容や運営の在り方、教科や他の教育活動との関連等を吟味し、総合的・横断的な学習として教育課程への明確な位置付けを図っていく必要がある。

復興教育 (全領域)	ね ら い 学校教育活動全体を通して、復興教育の視点を位置付けた学習活動を展開し、心豊かにたくましく生きる力および地域・社会の将来を担う人材を育成する。
---------------	---

【テーマ】 「ふるさとを元気に！笑顔発信 小本小学校」

【対象】 全学年

【本校における復興教育の視点】

- 1 郷土を愛し、復興・発展を支える人材を育てる。
- 2 震災と向き合い、体験そのものを教材とし、児童の生きる力を育む。
- 3 震災に関する一連の対応を、学校教育活動として有機的に関連付けて指導する。
- 4 本校の状況や児童・地域のニーズを踏まえて活動に取り組む。

【実践の概要】

本校では、今年度の教育課程に復興教育の視点を位置付けて学習指導を行うこととした。全学年の教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などの学習領域において指導内容を吟味し、内容に応じて復興教育の視点と関連付けを図りながら学習活動を展開した。

毎日の教育活動を通して、児童の生きる力の育成と復興教育の目標達成への指導が相乗効果をもって推進されるよう実践に取り組んだ。

小本の伝統芸能「七頭舞」



運動会において、地域の人々に勇壮な舞を披露した。

【実践例】

<1・2年生>

生活科 「みんなで手をつなごう」

地域の介護福祉施設を訪問し、入居者の方への歌の発表やいっしょにゲームを楽しむなどたくさんの交流をした。

これまでのボランティア教育のねらいに加え、地域のお年寄りを元気にしようという視点をもたせて活動した。



<3・4年生>

総合的な学習の時間 「鮭博士になろう！」

鮭のふ化場見学や稚魚の飼育を通して、地域の基幹産業である漁業について理解を深めた。

地域の自然豊かな環境や海がもたらす恵みに感謝し、地域への愛情を深めた。



<5・6年生>

体育・特別活動 「希望と笑顔あふれる未来に向けて」

被災した故郷のために、「今、自分たちができることはなにか」を考え、地域に発信しようと表現運動に取り組んだ。

震災前の小本の美しい海、そしてつらい時を乗り越え、復興へ前進しようとする人々のひたむきさ、力強さを表現した。



【学習の展開】

5年生 総合的な学習の時間 単元名 「開こう！小本の未来シンポジウム」



岩泉町復興課で復興状況を聞く児童たち。【気づく】



仮設商店街を訪問し調べ学習を進めるなかで、復興への自分の考えを深めた。【調べる】



グループごとに調べたことを発表し、学び合った。【広げる】

◆本単元の指導目標

震災から復興に向かう小本の人々の思いや懸命な努力、また地域の現状を知る活動を通して、今、そして未来の小本のために自分たちができることを考え、郷土への愛情を深める。

◆学習活動の実際

本単元第一次では、「復興に向かう小本の今を知ろう」と児童に投げかけ、仮設商店街や岩泉町復興課の設置、三陸鉄道の復旧などのこれまでの復興状況、そして、未だ処理しきれない小本浜周辺の瓦礫や破壊されたままの防波堤や道路など、地域見学を通して厳しい現実気付かせることにより活動の意欲付けとした。

また、この地域見学から、児童の「なぜ？」「もっと知りたい！」などの課題意識を引き出し、グループごとの課題を設定して、調べ活動ー中間まとめと展開した。

第二次では、「開こう！小本の未来シンポジウム」とテーマ設定をし、これまでの学習をもとに今、小本に生きる一人として自分ができることや思い描く未来の郷土についてシンポジウムを行い、復興への思いや郷土への愛情、そして自己のあり方や生き方について思いを深める活動とした。



文部科学省の山森光陽先生をお招きして開催した小本の未来シンポジウム 【表す】【未来に生かす】

＜小本の未来シンポジウムで児童から発表された「小本の町プラン」＞

- わたしは、笑顔があふれ元気な町づくりができると思います。小本の海でとれた魚を売る大きな店や震災を伝える資料館を作れば、地域の人たちがたくさん交流できると思います。
- わたしは、交流がたくさんできる明るい町づくりができると思います。ガレキを処理したあとの安全な場所を住宅地にし、たくさんの人に小本に住んでもらえばいいと思います。もとの学校は交流館のように使い、地域の人々がまたここで思い出を作れるようにしたいです。

【まとめ】

今年度の学習活動また日常の様子から、児童は学校・家庭・地域がひとつになり、復興に向けて懸命な努力をしていることを深くとらえ、実感したと思われる。震災・復興を自分のこととしてとらえ、毎日の生活のなかで自分ができることを実行しようとする自覚の深まりが感じられる。

復興教育の充実にあたり専門的な指導ができる講師を依頼し指導をいただいたことは、児童への貴重な学習機会の提供、また教職員にとって大変有意義な学びとなった。

今年度の成果および課題を明らかにし、次年度のさらなる教育活動の充実につなげたい。

地域との交流	ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> ・災害にあった自分たちの村を見つめ直すとともに、村の将来についての夢や願いを持つ。 ・村や地域のために、自分たちができることを考えて行動する。
--------	-------------	--

【題材】 復興子ども会議＜「田野畑村 教育の日のつどい」＞

【対象】 小学校児童、中学校生徒、小中学校保護者、村民、役場職員、復興庁職員

【復興教育の視点】

- ・自分たちの地区や田野畑村についての願いや夢を持ち、自分たちが「これからの田野畑村」の担い手となるという意識を醸成する。
- ・自分たちの願いや夢を叶えるために、「今、自分たちが何を行っていけばよいか。」考えていくとともに、具体的な行動を明確にして実践する。
- ・地域および行政との連携を深め、学校独自の活動ではなく田野畑村のまちづくりという捉えで活動を行っていく。

【実践の概要】

平成23年3月11日の「東北地方太平洋沖地震」により発生した大津波は、本村に人的にも物的にも大きな被害をもたらした。村の復興基本計画によると、「この震災を糧として、魅力ある新たな田野畑村に生まれ変わる『未来にむけた復興』という視点で取り組むこと」が謳われている。また、復興基本計画で打ち出された基本方針の1つに「地域振興」が掲げられており、その具体的な取り組み内容として、「教育・人材育成の充実」＜中期的な取り組み（概ね5年以内）＞がある。

「教育・人材育成の充実」では、(1)総合的な防災・復興教育の実践 (2)復興にむけた男女共同参画等の推進 (3)地域リーダーの育成 という3つの方針で取り組んでいくことが明言されている。

そこで、総合的な防災・復興教育の実践および復興にむけた男女共同参画等の推進という観点から「田野畑村 教育の日のつどい」における復興子ども会議を核とした田野畑村の復興にかかわる全校の取り組みを行っていく。

【実践の詳細】

- ①全児童に対するアンケートの実施（資料1）
- ②地区における代表の選出
 - ・地区の協力（子ども会組織を使って）
- ③アンケートの地区分類および地区ごとの集約
- ④地区代表（地区リーダー）による検討
 - ・地区ごとに分類したアンケートから、発表内容の決定
- ⑤復興子ども会議における発表原稿の作成
 - ・スライドの作成 ・読み上げ原稿づくり
- ⑥復興子ども会議における地区ごとの意見発表
 - ＜復興子ども会議 当日＞
- ⑦自分たちが村のためにできることの再検討

復興子ども会議のためのアンケート

年 名 前 _____

1. 自分の家の近く(自分の住んでいる地区)に「あったらいいな」と思うものは、何ですか？
(わ け を 書 け る 人 は、 わ け も 書 い て ください。)

2. 自分の住んでいる地区が、どんな地区であって欲しいですか？
(わ け を 書 け る 人 は、 わ け も 書 い て ください。)

3. 田野畑村をどんな村にしたいですか？
(わ け を 書 け る 人 は、 わ け も 書 い て ください。)

以上でおわりです！ ご協力ありがとうございました！

(資料 1)

【 展 開 】

<復興子ども会議にむけての打ち合わせ>

学校担当者（小・中）と教育委員会担当者で、復興子ども会議の趣旨および運営についての検討を行った。

<復興子ども会議 趣旨>

復興庁岩手復興局より、復興にむけたまちづくりのために、児童生徒の意見を大人に聞いてもらうための場として。（復興まちづくり子ども会議）

<全校児童へのアンケート調査の実施>

復興子ども会議の趣旨を踏まえて、自分の住んでいる地区を中心に考えることとした。

- アンケートの内容
- ①自分の地区に「あったらいいなあ」と思うもの（願い）
 - ②自分の地区がどんな地区であって欲しいか（夢）
 - ③田野畑村をどんな村にしたいか（夢）

<地区代表の選出（子ども会組織を通して）>

6地区（田野畑、沼袋、羅賀、机、浜岩泉、島越）のPTA地区長を通して、地区の代表として発表児童2名を選出（地区発表児童2名×6地区 合計12名）

- 発表児童の役割
- ①地区のアンケートの集約
 - ②発表スライドの作成
 - ③読み上げ原稿の作成
 - ④復興子ども会議当日における発表

<復興子ども会議（「田野畑村 教育の日のつどい」（11月3日）>

各地区の代表が自分たちの願いや夢を発表した。



地区の発表
(島越地区)



発表の最後
(全員で!)

意見交換



<復興子ども会議に対する保護者の声>

さて、11月3日には、村の教育の日のつどいが開かれました。以前の教育フォーラムです。田野畑村では、学校は統合され小学校が1つ中学校が1つと、2校になってしまいました。でもその後、大地を揺るがす大震災が起き、大変な被害となりましたが、今回の集いを見る限り、子どもたちに健全な思いと普通ではない方を生んでくれたような気がしました。「被災」というのは、相手が自然とは言え大変無様なことですが、それを目の当たりにしたからこそ生まれた思いがあったように感じました。今まであり「将来は村の方になりたい」と言う意見は聞かれませんでした。みんながこぞってそういう思いを持っているのです。～（略）～子ども会議では、小学生たちが各地区の問題点を見つけ、改善して10年後にはこういう理想の村になって欲しいと、具体的に情想しました。ひどくなってしまった村への思いから、最後に「わたしたちは、田野畑村が大好きです！」と声を合わせて叫びました。（同）

<11月6日 田野畑村・山地（やまち）福農牛乳酪 発行>

「まき（牧） 第188号 「子ども達の成長」より抜粋）

（6年 吉塚社太くん、父 吉塚公彦氏の執筆）

<今後の取り組みについて>

願いや夢に向かうため、今自分たちにできることをさらに見つめ直して行く必要がある。

防災教育

ね
ら
い

津波の知識を深め、日頃からの災害への備えを家庭へと広げる

【題材】

- (1) 地域の津波避難訓練へ参加しよう (2) 親子津波防災講座

【対象】

- (1) 全校児童・保護者・地域 (2) 全校児童・保護者

【復興教育の視点】

- ・津波についての知識を深め、自分で自分の命を守る行動ができるようになること
- ・学習会を通して防災意識の高揚を家庭へと広げていくこと

【実践の概要】

- (1) 例年地域で行われる津波避難訓練に学校として参加し、防災意識を高めるとともに避難の仕方等の再確認を行う。
- (2) パワーポイントを活用しながらの講義を親子で聴講し、津波災害についての知識を深める。

①津波避難訓練の様子



【実践の詳細】

- (1) 平成24年6月15日(金) 6:00~6:50
 <災害想定>岩手県沖を震源とする地震発生
 (震度5強) →大津波警報
 ・市の防災無線の指示に従って家庭ごとに保育園に避難
 ・避難後、市の防災行事に参加
- <学校の取り組み>
- ・地区行政区長との話し合い
 - ・教職員の共通理解確認の場の設定
 - ・家庭への参加要請の手紙配布
 - ・役割分担対応と避難状況の確認
- (2) 平成24年11月13日(火) 14:50~15:45
 授業参観後に「津波防災講座」を開催
 講師：県北広域振興局土木部
 河川港湾課長、港湾海岸チーム員
- ・津波映像写真(東日本大震災2011)
 - ・問題形式の講義(スライド・写真)
 - ・避難事例アニメーション
 - ・インタビュー動画「津波から逃げる」(事例)



②親子津波防災講座の様子



【授業の展開】

(1) 津波避難訓練

(ア) 4月に各家庭に「避難カルテ」を記入し、提出してもらう。

- ・ 各家庭ごとに避難場所について話し合う。
- ・ 災害時、自分がどう行動すればよいのか知る。
- ・ 学校としても災害時の児童の避難行動について把握する。

(イ) 防災無線の指示に従い、「避難カルテ」のように家庭ごとに避難する。

- ・ 避難行動の確認と周知を家庭ごとに行う。

(ウ) 地域の人と関わる

- ・ 地域の方との交流により顔見知りになる。

(2) 親子津波防災講座

(ア) 津波についての知識を深める。

(イ) 自分の命は自分で守るという意識をもつ。

(ウ) 日頃から地震への備えをする。

(エ) 家族で話し合い防災意識を高める。

避難先確認シート(家庭保存用)

児童名 _____ 年 _____ 年 _____ 年

☆地震等により、避難する場合(どちらかに○をつけてください。)

避難所(久喜保育所)を 利用する 利用しない

☆避難所を利用しない場合(利用できなかった場合)の避難先

避難先	
避難先住所	
避難先電話番号	

〈児童生徒の感想〉

- ・ 無線を聞いて家族と慌てないで避難することができた。
- ・ 釜石の子どもたちが自分で判断して避難できたように自分もなりたい。
- ・ 普段から家族で避難について話し合ったり、もしもの時を考えて避難袋を用意したい。
- ・ 忘れないように時々思い出すのは、大事だと思った。

〈まとめ〉

地域での避難訓練にみんなが参加するのが当然のことという意識を子どもの頃から持たせることが防災意識への高揚にも繋がる。

また、地域への行事に参加していくことがいつでも声をかけられるという人間関係の育成にも繋がると感じた。

子どもだけ防災教育を行っても大人が変わらなければ効果が上がらない。今後も、親を巻き込みながら大人の防災に対する意識を高め、家庭・地域との連携を図っていきたい。



〈保護者・地域の感想〉

- ・ 親子で防災について話題にするきっかけになった。
- ・ 自分で考えて行動できる子に育てたい。

総合的な活動	ね ら い	津波体験で学んだことを発信することで防災意識を高める		
【題材】				
○ 発信しよう ～津波体験から学んだこと～				
【対象】				
久喜小学校 5, 6年生 二戸市立二戸西小学校 全校児童				
【復興教育の視点】				
・津波体験で学んだことを発信することで防災についての意識を深めること				
【実践の概要】				
<p>(1) 久喜小学校の活動発表</p> <p>ア 昨年度の取り組み (DVD)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「今 伝えたいこと」 ・「生きる～久喜の海とともに～」 <p>イ 今年度の活動 (パワーポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「舳い」 <p>(2) 交流会</p>	<p>プレゼンテーション ～震災から復興への歩み～</p>			
				
【実践の詳細】				
<p>平成24年8月31日 (金) 10:30～11:30</p> <p>二戸市立二戸西小学校との交流</p> <p>(1) 久喜小学校の活動報告</p> <p>ア ビデオ鑑賞</p> <p>① 「今 伝えたいこと」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の5、6年生が津波体験で学んだことをまとめたビデオの鑑賞 <p>② 「生きる～久喜の海とともに～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・復興教育で得たこと、感じたこと等を未来へのメッセージとして制作したビデオの鑑賞 <p>イ パワーポイントによる今年度の活動紹介</p> <p>(2) 交流会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介、質問、感想 ・「舳い結び」講習会 			<p>グループ交流</p>	
<p>心のこもった手作りしおり ありがとうございました</p>				
				

【授業の展開】

(1) 久喜小学校の活動報告

ア ビデオ鑑賞に向けて事前に自分たちで鑑賞し、昨年度の活動やビデオで伝えたかったことについて確認する。

イ パワーポイントによる今年の活動紹介

- ・「さかな祭り」「磯観察」「漁業体験」「植樹祭」「進水式」のグループに分かれ、各活動の紹介と活動から学んだことを伝える。

(2) 交流会

- ・活動報告を中心に質問や意見・感想の交流を行う。
- ・漁師のロープの結び方の一つ（舳い結び）を各グループごとに紹介し、漁業に関心を持ってもらうきっかけを作る。
- ・交流会に向けて地域の方や祖父に「舳い結び」を覚えてもらい、漁師の知恵を知る。

「舳い結び」の実演



<児童生徒の感想>

- ・発信するために今までの活動で学んだことを振り返ることで、大切なことを確認することができた。
- ・二戸西小学校の人たちに記憶に残して欲しくて「舳い」結びを教えた。地域の方や祖父に楽しく教えてもらった。いろいろな結び方があるって昔の人の知恵に驚いた。

<まとめ>

発信するにあたって「今まで活動したこと」「学んだこと」「伝えたいこと」について、みんなて話し合い確認をすることが、自分たちの防災教育の深まりとなった。

交流後、二戸西小学校から送られてきたその後の活動についてのDVDを見て、久喜浜のゴミ拾いをして6袋拾ったということに恥ずかしさを覚え、自分たちができることについて考えるきっかけを与えてもらうことになった。

逆に、二戸西小学校へも考えるきっかけづくりとなったことを知り、子どもたちの喜びにつながった。

老人クラブ会長による「舳い結び」の講習



<保護者・地域の感想>

- ・「舳い」結びに興味を持ってくれてとてもうれしかった。
- ・どんな交流会にするか話し合う過程で、自分たちの地域の復興への歩みを再認識できてよかった。

地域との交流

ねらい

宿戸の水産業の復旧、復興の様子を調べ、地域の一員としてかかわろうとする態度を養う。

【題材】 水産教室 (5年 総合的な学習の時間 2時間)

【対象】 地域

【復興教育の視点】

◎実情に応じた内容

学校教育に位置付け、学校の状況や児童のニーズをふまえて取り組む。

【実践の概要】

宿戸小学校の水産教室は、ウニ漁の時期に合わせて、6月下旬から7月上旬にかけて行われる。宿戸漁港は学校から徒歩10分のところにある。地域の漁師の指導のもと、漁協や振興局の支援協力を受けて、5年生が「宿戸の海」「宿戸のウニ」「宿戸漁港で働く人」を見て感じて考える貴重な体験活動である。東日本大震災で漁港周辺も大きな被害を受けたが、少しずつ復旧が進んでいることも、この体験活動を通して学ばせたい。

また、本学習と一体をなすものとして、4年生以上で構成される海づくり少年団が、毎年5月、町主催のウニの森づくり植樹祭に参加して、地域の山林に1,500本の植樹を行っている。

【実践の詳細】

7月3日2・3校時、5年生の水産教室が行われた。早朝からの地元漁師によるウニ漁とその後の殻むき・瓶詰作業等で活気づく宿戸漁港で、まず、吹切守さんのお話を聞いた。吹切さんから、宿戸漁港の震災前と震災後の様子、ウニのからだの構造や成長、ウニ漁で気をつけることなどを話していただいた。

次に、ウニ獲りと磯観察。地元の漁師と交流しながら、ウニを獲り、宿戸の海に親しんだ。5年生は、滑りやすい岩場で恐る恐る生き物を探していたが、すぐに慣れて歓声をあげた。

殻むき体験では、漁協の人たちの正確で素早い作業とは違って、難しさを痛感。それでも、この体験が宿戸中学校での本格的な採捕から瓶詰工程までの学習へのステップになり、何より自ら殻むきして食べた宿戸のウニの味の格別さに大喜びした。



【授業の展開】

	学習活動	支援・留意点
導入	1 あいさつとウニ獲り名人の紹介 2 本時の内容を知る	・作業中の施設を共同使用するので、安全や衛生の事前指導を想起させる。
	宿戸のウニ獲りを聞いたり体験したりして、復旧・復興の歩みを実感しよう。	
展開	3 吹切守さんのお話を聞く。(10分) ○ 宿戸漁港の震災前と震災後 ○ ウニのからだの構造や成長 ○ ウニ漁で気をつけること 4 ウニ獲りと磯観察(30分) 5 ウニの殻むきと試食(20分) 6 感想発表	・宿戸漁港やウニ漁について、震災から復旧がすすめられていることに気付かせたい。 ・宿戸の主要なウニ漁について、掲示資料など効果的に使用したい。 ・安全に十分配慮しながら、地域との交流を図りたい。 ・全員が感想発表できるよう活動充実を図る。
終末	7 お礼のあいさつ 8 後始末	・ウニ漁に携わる人たちの工夫や復旧努力を知り、地域(漁協)の人たちと交流できたか。

【児童の感想】

- ・ウニのサイズを測って「小さいウニはとらない」など育てる工夫がわかった。
- ・津波で被害を受けたけど、漁業ができるようになってきた。もともにもどすまでがんばってほしい。
- ・ウニの殻むきはむずかしかったけれど、食べたらとてもおいしかった。
- ・漁協の人は、ウニの殻むきははやくて、しかもていねいだった。服装を見ても、衛生にとっても気をつけていることがわかった。

【まとめ】

- ・水産教室は20年近く継続しているが、復興教育の視点から再構築して学習し、宿戸の水産業の復旧復興にかける地域や行政の取り組みを体験を通して実感した。
- ・宿戸中学校と連携して学習をすすめ、学習の系統や発展を見通すことができた。
- ・地域の水産業関係者との交流を通じて、互いに豊かな海づくりの大切さを共有できた。
- ・天候に左右される学習であることを前提に、学習計画を柔軟に組み替えたい。



【保護者・地域の感想】

- ・宿戸の海やウニ獲りのことに関心が高まった。
- ・復旧にはまだまだだが、子どもたちがいきいきと活動していて、やってよかった。
- ・担い手の育成につながることも期待している。

⑨ 各学校の特色を 生かした取組	ね ら い	普代浜の景観の変化を糸口に海岸林のもつ特性についての学習を通し、地域に合った植樹の必要性を知り、実行することができる。
------------------------	-------------	---

【題材】

「海岸林の働きについて学び、行動しよう。」

【対象】

普代小学校 5年生（講演会は5・6年生、植樹祭については全校の希望者対象）

【復興教育の視点】

地域の環境に対して自分たちができることを考えたり実行したりすることを通して、自分たちの住む地域に対する愛情や誇りを育てるとともに、地域の復興を担う人材としての素地を養う。

【実践の概要・詳細】

概要	時	主な活動	重点目標	備考
発見	1	・現在と過去の普代浜の写真を比べて、学習課題や活動への願いをもつ。	（主体的・創造的な態度） 課題に対して積極的に関わろうとしたり、活動を継続したりしようとする。	・以前の普代浜の写真 ・八戸市市川町の様子（ユナエブ等）
	2	・海岸林の津波減災の事例を知る。		
実践	3	・海岸林の津波減災の事例を調査し、植林体験を通して、海岸林の必要性について実感する。	（課題設定の能力） 海岸林について調べる中で、その必要性について課題を見いだすことができる。	・八戸市市川町市川船溜付近の見学（青森県林業振興課職員）
	4			
	5			
	6	・海岸林の植林の際に必要なことや実際の活動の流れを知る	（問題解決の能力） 調べて分かったことからさらに課題を追究したり、見直したりすることができる。	・普代村での植林活動についての説（国際生態学センター林博士）
	7	・普代村での植林体験		
	8	・植林に必要な苗の育苗を始める。 （どんぐり集めなど）	（表現力） 活動内容を分かりやすく伝えるために、情報を編集することができる。	・育苗活動（B&G 森田氏）
13		・育苗活動の継続 （新年度に次学年へ引き継ぐ）		
表現	14	・活動内容をまとめ、発信する。（新聞作り3学期）		社会科 環境に関わる単元との関連
15				
16				



【授業の展開】

(指導計画 第5時 海岸林学習のまとめの学習の実際)

- 八戸市の海岸林で見たことや、分かったことを発表してください。
 - ・海岸林が津波から家などを守ったことが分かった。
 - ・海岸林は津波を防ぐためだと思っていたけど、実際には砂が飛んでくるのを防ぐためのものだった。
 - ・海岸林が砂を防ぐだけでなく、津波で流された船などを止めて、家などを守った。
 - ・海岸林の木が大きくなるまでにはとても長い時間がかかり、自分たちで作るのは大変だと思った。
 - ・海岸林のマツは、津波による塩で死んでしまった。
- 今回学んだことで、私たちの普代村や普代浜で活かしたいことや、逆にちょっと無理だなあと思うことを発表してください。
 - ・海から家や学校が近いから、みんなの安全を守るために、市川町のように木を植えたほうがいいと思う。
 - ・市川町は海から家までの間の7haの土地に海岸林があるけど、普代村でそんなことをしたら、家とか道路とか取り壊さないといけないから無理だと思う。
 - ・海岸林を作ったとしても、普代村には水門があるから、必要はないと思う。
 - ・海岸林は津波から守るものではなく、砂が飛んでくるのを防ぐから、水門があっても海岸林は必要だと思う。
 - ・広さが十分に取れないとしても、間隔を詰めてたくさん植えればいいと思う。
 - ・海岸林は砂対策と言っているが、普代村の場合あまり砂が飛んでくることはないのではないかな。
 - ・水門の内側には木があるので、これ以上木を植える必要はないのではないかな。
 - ・砂から地域を守るのだから、水門の外側に植えていけばいい。広さも確保できる。
 - ・市川町の場合は、堤防の内側に海岸林があるので普段は塩(波)が来ることはないけれど、普代村の場合は水門の外だと塩をかぶって、木が枯れてしまう。
 - ・津波の時にがれきを止めたのはたまたまだから、普代村で活かすことはできない。
 - ・緑や海岸林を作るのは大変だけれど、(作り上げて)大切にしていくことは、自分たちも賛成だ。
 - ・海岸林ができるには長い年月はかかるけど、自分たちもやってみたい。普代村でもできるはず。
- 市川町のように木を植えたいという意識はあるのですね。ただ、植える木がマツでは塩にやられてしまうとか、植える場所のこととかで、悩んでいるようですね。



(指導計画 第6・7時 I G E S国際生態学センター 林博士講演会後の児童の感想から)

- ・林さんの話をもっと聞きたかったし、8月7日の植樹祭が楽しみになりました。
- ・海水に当たって枯れる木、海水が当たっても枯れない木が分かって、良かったです。
- ・杉は潮風に弱く、松は潮風に強いことが分かりました。
- ・木の種類によって、塩水に強い木や弱い木など様々な木があったのが面白かったです。木は防災に役立つことが初めてわかりました。
- ・木が自然のダムになったり酸素を作ったりしていることは知っていたけど、火事を防いだり、津波から守ってくれたりもして、木ってすごいと思った。
- ・津波や風から守ることは知っていたけど、熱から守ってくれることを初めて知りました。

- ・木の役割が津波の力を弱くしたり、災害などを防ぐということが分かりました。
- ・木でいろいろな災害が守れることを知ってびっくりしました。木や草は、大切なことが分かりました。
- ・冬にも枯れない木は、海水などに強いことが分かりました。
- ・木で津波を守れるなんてすごいいいと思いました。水をはじく葉があるのかと思ひびっくりしました。
- ・土地に合った木があることが分かりました。
- ・潮風や塩水に強い木は、クロマツの他に何があるのかなと思いました。
- ・普代では、どの種類の木が一番適しているのかを、もっと知りたいです。

(8月7日に植樹祭が行われた。当初は普代浜近くの道路脇が予定されていたが、諸々の事情で学校の敷地内の海に近い斜面の部分に植林することとなった。

当日はIGES国際生態学センターの宮脇昭博士が講演で地域固有の潜在植生を用いて森作りをする意義や植樹の方法を説明した後、地域の子ども園の園児や中学生、一般参加の方々と一緒に植樹に取り組んだ。)



(植樹祭に参加した児童の感想)

- ・みんな暑い中がんばっていていいと思いました。またいつか大津波が来ても、(植えた)木で津波を防げたらいいと思いました。また木を植えたいと思いました。
 - ・普代にも木をたくさん植えることができ良かったし、これからは津波が来ても、植えた木で守ってほしいです。
 - ・海の近くに木を植えて、これからは風が吹いた時などは植えた木が(砂を)防いでくれることを信じて活動しました。
- ⇒前の学習と関連させて、防災としての海岸林に機能に着目している感想。

- ・2回目の植樹だったけど、前と感覚が全然違い、うまく植えられませんでした。でも、優しく作業できて良かったです。木の種類がいっぱいあってびっくりしました。また今度植える機会があれば参加したいです。
 - ・(斜面の所なので)木をまっすぐに植えるのが大変でしたが、みんな暑い中でもきれいに植えていて良かったです。(植えた)このたくさんの木が、前みたいに大きな木になってほしいです。
 - ・しっかりと木を植えることができました。たくさん植えることができたので、何年後になるか分からないけれど、立派にすくすく育ってくれればいいと思います。
 - ・木を植えると、心が気持ち良くなりました。何もなかった場所が緑がいっぱいになったから、気持ち良かったです。
 - ・いろいろな木を植えることができ良かったです。これから森になっていくのが楽しみです。(森に)いろいろな動物が来てくれたらうれしいです。
- ⇒環境の復元や美化に関する感想。

(植樹祭に参加した地域の方の感想)

- ・津波はまた必ず来るにちがいない。学校にいる時は先生たちに守ってもらえるが、それ以外の時はどうか…。どんな時でも自分の命は自分で守れるような子に育ててほしい。そういった点で今回の植樹は、森を作ることを通して津波について改めて考えるきっかけとなったし、これから木の成長を見ながら常に津波に対する危機意識を持つことにもつながると思う。

(指導計画 第8時～ 植林の意義を再確認し、必要な苗の育苗を始める)

秋になって木の実が落ちる時期を迎えた所で、植林事業を推進しており植樹祭でもお世話になったB&Gの森田さんを講師に迎え、植林の意義を再確認するとともに、次の植林に向けての苗作りを始めた。



前回の活動から間が空いていたため、森を作ることが災害の被害を軽減したり、豊かな環境作りに寄与したりすることなど、写真を使いながら説明された後、実際に学校の裏山に分け入り、ドングリをはじめとした自生の植物の種子(実)をみんなで集めた。若干時期がずれてしまい、主となるドングリを集めるためにバスで移

動するなどのトラブルはあったものの、自分たちが普段の生活でよく見かける実も森作りの育苗に使えることを知り、児童は意欲的に活動に参加していた。最後は苗床に集めた実を植え、来年の春まで継続して世話をしていくことを確認した。



【まとめ (成果と課題)】

- 身近な存在であった「普代浜」から学習をスタートさせたことは、子ども達の意欲や関心を高める上で効果的であった。環境の保全・美化の観点からの「森作り」にも児童の活動の流れは自然に移行していったと考えられる。
- 植樹祭の活動は村を挙げての活動となり、子ども園、中学校、村民を巻き込んだ活動となった。活動の枠を学校だけではなく地域にまで広げることができた。
- 「森作り」という環境に関わる活動は、社会科の学習や、総合的な学習の時間で取り組んでいる漁業に関連する活動にもつながり、子ども達にとって学習と体験を有機的に結び付けることができた。世界中を飛び回っている専門の方のお話を聞いたことも、子どもたちの視野を広げる上で大変有効であった。
- 活動の主体が5年生を中心とした高学年であった。今後の育苗に関わる活動を次学年に確実に引き継ぐことで、継続的な取り組みとなるようにしたい。
- 活動の出発点である「普代浜」に関わっては、立ち入りが制限されていたり、今後の整備計画がはっきりしていなかったりしていたため、子ども達が願う活動を実行に移すことができなかった。関係諸機関に働きかけながら、子ども達の願いが少しでも今後の復興計画に活かされるようにしていきたい。

防災教育	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の命は自分で守る、状況に応じて主体的に判断できる力を育てる。 ・自分で情報を把握し、判断するといった思考力・判断力及び実践意欲を育てる。
------	-----	--

【対象】 全学年児童

【復興教育の視点】

○「学校の実情に応じた内容」

被災地域に位置する学校でもあり、命を守る教育、災害に備える教育を年間を通じて計画的に行う必要がある。

【実践の概要】

- (1)一斉下校指導
- (2)避難カード
- (3)避難訓練の実施【5月地震・津波／7月火災(日時予告なし)／9月不審者】
- (4)安全点検(指導)の日の設定

【実践の詳細】

(1)一斉下校指導【4月9日・10日】

- ・地区担当者の引率による一斉下校を実施した。
- ・通学路上で警報が発令した場合の避難経路・避難場所を確認しながら下校指導を行った。

(2)避難カード

- ・避難場所・連絡先を記入した避難カードを家庭用・学校用・ランドセル用として準備し、災害時に備えた。

野田小ひなんカード (家庭用)		____月 ____日記入
年 組 名 前 _____		兄弟 年 組 名 前 _____
		姉妹 年 組 名 前 _____
1 避難場所		
<input type="checkbox"/> 家族といるとき (子どもだけで家にいるとき)		<input type="checkbox"/> 登下校途中 _____
2 緊急連絡方法 (携帯番号や緊急連絡先) 記入例: 090-△△△△-□□□□ (母携帯)		
第1連絡先 (日中、夜等に確実につながる) _____		
第2連絡先 _____		
3 その他 (ご自由にご記入ください)		

■「災害用伝言ダイヤル」の使い方		
○伝言の録音 171→1→自宅の電話番号 (市外局番から) →録音する		
○伝言の再生 171→2→自宅の電話番号 (市外局番から) →再生される		

(3)避難訓練の実施【5月地震・津波／7月火災(日時予告なし)／9月不審者】

①地震・津波避難訓練 (5月10日実施) / 火災避難訓練 (7月4日実施)

ア ねらい

- ・自分の身を守るための方法を理解させる。
- ・指示に従って安全な行動をとる態度を養う。

イ 留意点

- ・地震や津波、又は警報音、「地震・津波」という言葉に恐怖心をもつ児童もいる。そこで訓練の必要性と共に、ケアも重要と考え事前・事後指導を丁寧に行った。
- ・スクールカウンセラーによる観察・対応も行った。

《事前指導内容》

- ・避難訓練の流れや注意事項を確認をする。
(例えば)
 - ・非常ブザーがなる
 - ・「地震・津波」の避難訓練であること
 - ・避難経路
 - ・災害に応じた対処の仕方（カーテンの開閉・一時避難の仕方 等）
 - ・「学校経営概要 訓練実施計画」に記載されている留意点
- ・「地震や津波」「3・11」を想起する子ども達もいると思うが、避難訓練は自分の命を守る学習であり、避難の仕方がわかれば、災害が起こったときに対処できるということを伝える。
- ・避難するときの注意事項『お・か・し・も』についても指導する。
- ・避難訓練前後の体調・顔色などをいつも以上に気をつけて観察し、声かけや必要に応じての面談を実施する。
- ・どうしても「訓練に参加できない」という場合には保健室で休ませる。一人で教室に残さない。

《事後指導内容》

- ・「自分の身を守るための避難の仕方がわかったか」を確認する。
- ・子ども達から心配な事が話された場合、丁寧に聞き答える。または職員で検討してから伝えることを子ども達に話す。
- ・自然な形で簡単な『リラクゼーション』や『アクティベーション』を取り入れる。

(会議提案資料より)

ウ 訓練後の反省

- ・「自分の命を守るとはどういうことか」考えることができた。
- ・教科の学習（理科）と関連付けながら、地震の仕組みも学ばせていきたい。
- ・被災した地域・被災した児童であることをふまえ、何のために訓練をするのか指導していく必要がある。

②不審者対応避難訓練(9月12日実施)

- ・地震・津波・火災避難訓練と同様の配慮をしながら訓練を実施した。
- ・駐在所所長から指導・講話をいただいた。

(4)安全点検(指導)の日の設定

訓練の時だけでなく、様々な緊急対応について月1回程度指導を重ねる必要がある。

そこで、防災教育を積み重ねていくために、2学期から月初めを『安全点検(指導)の日』に設定し指導にあたった。

(指導内容例)

- ・教室内の整理整頓・・・避難路の確保のため
- ・整然とした整列・・・素早い避難／素早い人数確認のため

【成果と課題】

- ・避難訓練や避難カード作成、一斉下校指導を行ったことで、子ども達の防災に対する意識が高まってきている。
- ・訓練の必要性を理解させると共に、振り返りや評価を通して、安心感と自信をもてるようにしていく。
- ・スクールカウンセラーから「怖さや不安を感じた子ども達もいたので、今後避難訓練実施時には、リラクゼーションやアクティベーションもあわせて行った方が良い」という助言を受けた。心のケアも合わせて行っていく必要がある。
- ・地域の道路や設備の状況に合わせて、指導内容の見直しをしていく。

キャリア教育 地域との交流	ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> 郷土の復興に力を注ぐ人々から、自らの役割を果たすにはどうすればよいかを学び、実践しようとする態度を養う。 自分の生活が地域・社会との関わりの中で成り立っていることに気付き、地域の一員として積極的にかかわろうとする態度を養う。 災害で被害を受けた交通網や産業、住宅や街の復旧、復興の様子を調べ、災害に強いまちづくりについて理解できるようにする。
------------------	-------------	---

【題材・対象】

第5学年 総合的な学習の時間 「野田を再発見」
第6学年 総合的な学習の時間 「野田村元気発信パンフレットを作ろう」

【復興教育の視点】

- 「ひとづくり」 郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成する。
- 「体験に学ぶ」 震災津波に向き合う人々の取り組みを学ぶことによって得た思いや気付きをもとに、自分たちにできることを探る。

【実践の概要】

○第5学年 「野田を再発見」指導計画 (20時間)

次	活動内容	関連
第1次 【課題の設定】 (3時間)	1 村の人々・先人の復興に対する思いや、実際の取り組みに触れ、自分たちにできることは何か考え、実行のための計画を立てる。	・国語「百年後のふるさとを守る」
第2次 【情報の収集】 (5時間)	2 都市公園のデザインを通して、主体的に復興にかかわり、未来の村作りについて考える。 (5・6年合同) 3 被災した事業所を訪問し、復興の様子をインタビューしたり、これまでの苦勞を聞いたりする。 4 被災した畑の整備をしながら大豆の栽培から豆腐作りまで体験し、村に伝わる食文化と、それを受け継ぐ人々について理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> ・都市公園ワークショップ ・野田村役場 ・理科「流れる水のはたらき」 ・社会「水産業の盛んな地域を訪ねて」 ・野田漁協・下安家漁協 ・のだ塩工房 ・大豆生産者の方々 ・豆腐生産者の方々
第3次 【整理・分析】 (5時間)	5 集めた情報をもとに、友達と共同して、まとめ方、伝え方を考える。 6 学習発表会を通して自分たちの学びを発信するための方法を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・都市公園ワークショップ ・学習発表会 ・国語「説明の仕方について考えよう」
第4次 【まとめ・表現】 (7時間)	7 学習発表会で発信するための計画を立て、実行する。 8 発表を通して、自分たちの学びを発信する。	・学習発表会



<都市公園ワークショップ>



<大豆の畑整備>

<学習発表会>



○第6学年 「野田村元気発信パンフレットを作ろう」指導計画（20時間）

次	活動内容	関連
第1次 【課題の設定】 (3時間)	1 ふるさとの特色やよさを知るとともに、村の人々・先人・先輩の復興に対する思いや、実際の取り組みに触れ、自分たちにできることは何か考え、実行のための計画を立てる。	・前年度6年生作成 「野田村元気新聞」
第2次 【情報の収集】 (6時間)	2 都市公園のデザインを通して、主体的に復興にかかわり、未来の村作りについて考える。 (5・6年合同) 3 昨年度の6年生が取材した事業所を訪問し、復興の様子をインタビューしたり、これまでの苦勞を聞いたりする。 4 昨年度の様子と比較する中で、着実に復興していることを実感したり、現在苦勞していることについて理解したりする。	・都市公園ワークショップ ・野田村役場 ・下安家漁協 ・のだ塩工房 ・えぼし荘 ・大沢菓子店 ・野田村保育所 ・農業協同組合
第3次 【整理・分析】 (6時間)	5 集めた情報をもとに、友達と共同して、まとめ方、伝え方を考える。 6 ねらいに沿ったパンフレットを作るため記事を選択する。	都市公園ワークショップ 国語「町のよさを伝えるパンフレットを作ろう」
第4次 【まとめ・表現】 (6時間) ※3学期	7 選択した記事をまとめ、パンフレットを作成する。 8 お世話になった各事業所などにパンフレットを届け、自分たちの学びを発信する。また、校内に掲示し下学年にも紹介する。	国語「町のよさを伝えるパンフレットを作ろう」



<都市公園
ワークショップ>



<下安家漁協>



<えぼし荘>

※活動にあたり配慮した事項

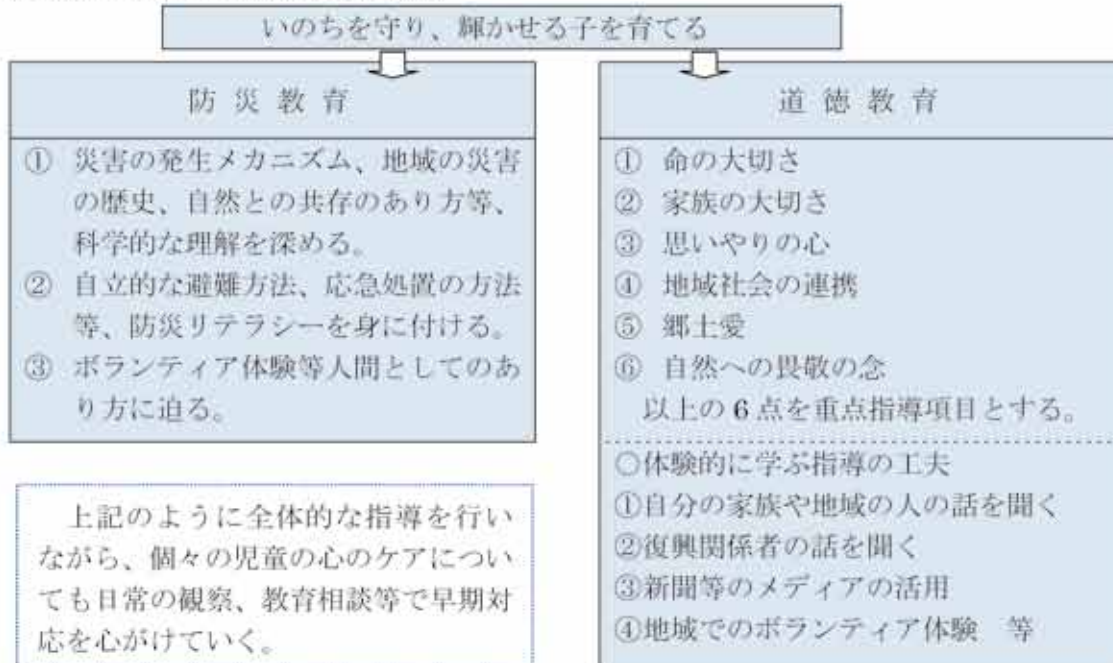
- ・被災について想起することが大きなストレスとなる児童もいるので、様子を観察しながら活動した。また、安心して活動できるように、事前に活動の意図や内容を児童に知らせ、リラクゼーションやアクティベーションなども取り入れた。
- ・校外学習の際は、打合せを密に行い、緊急時の対応と避難場所を確認した。

【成果と課題】

- ・地域の方々が温かく迎えてくれたので、児童は自分たちが愛され大事にされていることを実感できた。
- ・実際に復興に携わる人々と直に触れ合うことで、日頃意識することの少なかった地域の人々の活動や、村のよさについて、深く考えることができた。
- ・地域の方々からは、「地域に目を向けて学習してもらい、嬉しく思っている。」「地域を大事にする子ども達になって欲しい。」「被災後、将来を見据え立ち上がった。継続して、もっと地域のことを知って欲しい。」などの感想が寄せられた。
- ・前年度は地域の状況について取り上げることが難しかったが、今後は今年度の実績から各学年の活動内容を見直し、系統的に指導する必要がある。
- ・他地域への発信についても、本校の児童の学びに合わせ検討したい。

道徳教育 防災教育	ねらい	<p>いのちを守り 輝かせる子を育てる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害から自他の命を守るために必要な知識や態度を身に付けさせる。 ・道徳的価値の形成を図り、自己の生き方について考えを深める児童を育てる。
--------------	-----	--

1 復興教育全体計画（中心部のみ抜粋）



2 各学年の主たる実践

学年	教科等	単元名	展開の概要
1	道徳	いきもののことをかんがえて 「ごめんね みなみ」	① 資料を読み、身近な自然や動植物とのかかわりについて考える。 ② 身近な自然や生き物とのかかわり方を振り返る。 ③ 生き生きと暮らす生き物の映像を見て、実践意欲をもつ。
2	道徳	つながるこころ 「ころきちとバイオリン」	① 資料 復興を目指して助け合っている写真 ② 資料を読み、友達の立場や気持ちを考えて助け合うことの大切さや心の結びつきを感じ取らせる。 ③ 作文「つよくてやさしい人になりたい」の読み聞かせを聞く。
3	学級活動 (防災)	自然災害から身を守ろう	① 災害が起きたとき、どう行動すればよいかを知る。 ② 保護者と離れてしまったらどうするかを考える。 ③ 自分の身を守る方法についてまとめる。
4	道徳	郷土愛 「みんなの思いが伝わるといいな」	① 震災後、自分の仕事を辞めて郷土の復興のために家業を継いだ宮古市の青年の記事を読んで、感想を話し合い、価値を確認する。 ② 資料「みんなの思いが伝わるといいな」を読んで話し合う。 ③ 教師の実体験をもとにした説話を聞く。
5	道徳	郷土愛、愛国心 「雪谷川のはんらん」	① 二戸市についての自分のイメージを話す。 ② 資料を読んで、「わたし」の気持ちについて話し合う。 ③ 二戸市のよさについて話し合う。
6	社会科 (防災)	身近な暮らしと政治	① 震災直後の写真と現在の様子を資料から見比べる。 ② 復興に向けて民間で行ってきたことを経験から話し合う。 ③ 市や国が行ってきた取組を新聞から調べ、具体的に交流する。

3 実践の実際

(1) 各学年の指導事例－2年道徳「つながるころ」

①ねらい

相手の立場や気持ちを考え、互いに助け合っていこうとする心情を育てる。

②展開・・・前ページ 「各学年の主たる実践」参照

③主な資料

- ・道徳（復興資料）「ころきちとバイオリン」 ・「特別報道写真集 東日本大震災」岩手日報社
- ・岩手日報（六魂祭についての記事） ・「つなみ 被災地のこども80人の作文集」文藝春秋

④授業の様子

- ・中心資料の内容が「地震による母の死を受け入れることができず、暗い気持ちですごしていたころきちが、友達との絆から、周りの人を元気づけようと音楽会を開く前向きな気持ちを取り戻す」という児童が共感しやすい内容であったため、素直な気持ちで思いを話し合うことができた。
- ・大震災との関連で提示した資料が効果的であった。どの子も食い入るように写真資料を見ていた。
- ・被災地の震災直後の資料から、助け合い、復興に向けて行動を始めるまでの資料だったので、児童も前向きな気持ちになれた。



⑤授業後の広がり

授業後、学年のスペースに使用した資料と児童の感想を展示。そばにいすも置いたので、児童はそこに腰掛け、じっくりと資料を読んでいた。授業の振り返りのときと2週間後とで2回感想をとっている。2回目は自分自身の変容について書かせたが、「やさしくしようと考えようになった」「まわりの人を大事にするようになった」というように書いた児童がほとんどだった。

(2) 全校での取組事例－「防災の日」の展示

9月1日の「防災の日」から1か月を「防災月間」として学校中心部のフリースペースに防災関係の展示を行った。今年度が初めての取組である。

<展示内容>



- ①それまでに行った各学年の授業の資料、児童の感想
- ②もし災害にあったら・・・身の守り方
- ③災害時の緊急持ち出し袋の中身
- ④防災関係児童用図書



児童が最も立ち寄りやすいところへの展示だったので、他学年の授業の資料を読んだり、防災グッズを手にとって見たりしている姿がよく見られた。

今年度はとくに感想をとることはしなかったが、次年度以降は内容の工夫とともに児童の反応を図ることも取り入れていきたい。

4 取組を振り返って

各学年の実践はそれぞれに学年の実態に合わせて無理のない充実した展開ができたと思われる。しかし、それをつなげ、児童に継続的に残るものにするにはあと一段階の展開が必要である。今後、PTA行事のときに被災地への協力を考える機会があるので、それを生かして今年度のまとめをしていきたい。

ボランティア教育 防 災 教 育	ね ら い	自他の命を守り、人のために尽くす社会人の育成を目指す。
---------------------	-------------	-----------------------------

- 【題材】 1 まごころフラワー作戦（ボランティア教育）
 2 防災教育講演会と被災地訪問、命を守る地域との連携（防災教育）
 【対象】 全校41名。（1年9名、2年3名、3年4名、4年9名、5年6名、6年8名）
 【復興教育の視点】「ひとづくり」

- 他者を尊重する態度や思いやる気持ち、公共のために尽くす心など、体験活動を積極的に取り入れながら育成するとともに、自分が価値ある存在であることを実感し、豊かな社会を築いていこうとする態度を育成する。（ボランティア教育）
- 自然災害等の危険に際して、周りの状況に応じて自ら危険を予測し、自らの命を守りぬくために、危険を回避する能力を高め主体的に行動する態度を育成するとともに、支援者としての視点からも安全で安心な社会づくりに貢献する意識を高める。（防災教育）

【復興教育の柱1 ボランティア教育 まごころフラワー作戦】



シクラメンの葉組み



野田小学校の6年生の皆さんへ

- 1 被災地の友達を元気づけようと「長興寺小学校まごころ花くらぶ」を結成した。
- 2 児童の募金等でシクラメンの苗を一戸高校より購入した。更に、育て方を一戸高校の生徒さん方から教えていただき、その育て方を守りながら各学級で育てた。
- 3 各学級で育てたシクラメンの花30鉢のうち、16鉢を野田小学校へ、残りの14鉢は自校に置いた。

ーきずなー「はなれていても、心はひとつ」

- 4 野田村への訪問では、村からバスを出していただき、直接、野田小学校（代表として6年生）のみなさんや野田村役場の方にシクラメンの花を渡すことができた。
- 5 児童が育てた花（フウセンカズラや三時草）を地元の「産直」で販売し、その収益を次年度のシクラメン購入資金とする。



野田村役場の方へ

未来におかっ、前へ、前へ...



一緒に花を
さかせましょう。 長興寺小 花くらぶ



産直での花の販売(自主参加の子どもたち)

【学校を支える家庭・地域・行政との協力】

- 【地域の協力】 花の苗は、同じ二戸地区の一戸高（総合学科）の生徒さんたちが育てたものを購入（栽培方法も教えていただく）
- 【行政の協力】 村の教育委員会からバスを出していただいて全校で野田村を訪問
- 【家庭の協力】 児童が育てた花を保護者の応援を得て地元の「産直」で販売



【今後も継続するためのシステム】

【復興教育の柱2 防災教育 防災教育講演会と被災地訪問、命を守る地域との連携】

1 「震災津波の様子を知り命の大切さを学ぶ講演会」

沿岸地区に勤務し東日本大震災・津波を経験したかつて本校に勤務された方をお招きし、震災の時の様子やその後の避難所での生活の様子について講演していただいた。

講演会第1部 全校児童向けに

講演会第2部 保護者並びに地域住民の方向けに

【児童の感想】 長興寺は、震災の影響で停電になったけど、沿岸に住んでいないので津波は来ませんでした。何もかも使えなくなって苦しい生活の壁を必死に生きようとする被災地の人の、絆や勇気に感動しました。岩手県中の絆や勇気を、今後の生活にいかしていけたらなと思いました。
(4年男子)



児童向けの講演会



保護者・地域住民向けの講演会

2 被災地野田村訪問

野田村教育委員会の方をお願いし案内していただいた。

被災地の状況と復興への地元の方々の思いを学んだ。

【児童の感想】 (前略)次に、野田村を案内してもらいました。じしんのときのしりょうを見たら、しゃしんだけでこわくなりました。本当につなみを見た人は、もっとこわかったと思います。ぼくは、かせつじゅうたくを見たところが一番心のこりました。わけは、家や自分の大切なものがなくなってかわいそうだったからです。かせつじゅうたくにすんでいる人たちが元気になってほしいです。
(2年男子)



野田村訪問：役場の方の説明



安全ボランティア初出動式



地域の方々に見守られながら登校

3 命を守る地域との連携

「長興寺小学校地区安全ネットワーク」設立

学校の敷地のすぐそばを通る国道340号線は、道幅が狭く、緩やかなカーブが続き見通しの悪い通学路である。そこで、地域の皆さんに協力をいただいて、地域が主体となって児童の安全や防犯、防災について協力をいただく組織を立ち上げた。二戸警察署九戸駐在所の所長さんから助言をいただきながら、老人クラブをはじめ地区の交通安全協会、交通指導隊、交通安全母の会、防犯協会、PTA、スクールガード、ボランティアでスタート。村の交通安全協会から安全たすき100本、防犯協会からのぼり30本を寄贈いただいた。たすきをかけ、のぼりを立てながら、毎月、月初めの登校日に声掛けや見守り活動を行っていた。

【終わりに】

- 1 地域の復興教育推進モデル校として、被災地の学校の心に寄り添う形で、内陸部に住む子どもたちが、地震や津波に向き合い、自分のこととして受け止められる心を育てたい。(WIN&WINのパートナーシップ)
- 2 教師も子どもも、可能な限り実際を見て学ぶという姿勢を大事にしたい。
- 3 自校の安全や防犯、防災環境を見つめ、学校が地域づくりに貢献していくこと、その際に、地域の特徴を強みとして活用することを大切にしたい。
(高齢化率を強みとして、お年寄りのお力をお借りしながら)
- 4 10年後、20年後を見据えてシステムづくりを進め、地道に活動していくことを大事にしたい。

ね
ら
い

平成 23 年 3 月 11 日(金)14 時 46 分に発生した東日本大震災津波を学校教育活動に位置付け、日常の教育活動の中で、「知る、学ぶ、考える、行動する」を学習のサイクルとして、大地震や津波等の自然災害及び防災や危機管理に対する知識や理解を深め、児童に何ができるかを思考させ、その**行動化、実践化**を目指す。

さらに、諸々の活動を通じて、将来に亘り、郷土岩手のため、生まれ育った故郷のために寄与・貢献できる「**人づくり**」を目標とし、復興・発展を支える**人材を育成**する。

【題材】

- (1) 東日本大震災津波についての事実を知り、学ぶこと
- (2) 被災地、被災者の現状を知り、学ぶこと
- (3) 日常の教育活動の組み替えを行い、寄与・貢献できる内容を考え、行動すること

【対象】

- (1) 久慈市・・・「まちなか水族館支援」（もぐらんぴあ水族館が前身）
- (2) 野田村・・・野田村立野田中学校、十府ヶ浦海岸、国民宿舎えぼし荘



【復興教育の視点】

- (1) 「ひとづくり」—郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成する。
- (2) 「体験から学ぶ」—体験そのものを「教材」とし、児童生徒の「生きる力」を育む
- (3) 「組織的・有機的指導」—震災津波に際した対応を教育活動に関連付けて指導する
- (4) 「学校の実情に応じた内容」—学校の状況や児童及び地域のニーズを踏まえる

【実践の概要】

- (1) 募金活動⇒義援金は「まちなか水族館」へ
- (2) 現地研修⇒8 月 1 日と 12 月 26 日の 2 回、久慈市と野田村に訪問し実地研修
- (3) 全校学習⇒学習発表会時に児童会執行部が研修内容をまとめて発表
- (4) 作品制作⇒全校児童による「がんばっぺスイミー」の製作と贈呈



【実践の詳細】

- (1) 募金活動
5 月 26 日の運動会昼食時に児童会執行部が中心となり、保護者や地域の方々の中に入り募金活動を展開した。38,011 円の募金を 8 月 1 日の研修日に児童会代表が「まちなか水族館」館長へ手交した。
- (2) 現地研修
夏場は教員と児童会執行部で「まちなか水族館」館長と野田中学校副校長の講話を聞き、冬場は教員のみで、「まちなか水族館」館長の講話とえぼし荘職員による震災ガイドを聞き研修とした。
- (3) 全校学習
10 月 21 日の学習発表会時に、全校児童、保護者、地域の方々を対象に、「復興教育実地研修のまとめ」と題し、児童会執行部が研修内容を 20 分間にまとめあげ、広く周知した。【次ページに実践例】
- (4) 作品制作
心を込めた作品を贈りたいという児童の思いから、水族館であれば小学校 2 年の国語で習う「スイミー」の発案になり、横 320cm×縦 220cm の大きな作品を製作し、職員研修時に贈呈した。

【授業の展開】 ◇実践例【第1回現地研修を通して】◇

全校学習とした「復興教育実地研修のまとめ」の実践

◆活動のねらい 自らが取材した内容を全校児童、保護者、地域の方々に伝講すると共に、感じ取ってきた思いや願いを全員が共有できるようにする。

	学習内容	児童の動き	教師の働きかけ
事前	1 事前研修 (1) 目的、日時、内容、方法、選元の仕方 (2) 当日の動きの確認	・児童会執行部8人が研修目的、内容等を理解する。 ・義援金手交の仕方を確認する。 ・現地での質問を考え、整理をする。	・校長が、研修の目的、内容、方法等、研修計画について指導する。 ・義援金の手交等、具体については児童会担当が行う。
中	2 研修日 (1) 義援金手交 (2) 館長講話 (3) もぐらんぴあ跡地視察 (4) 十府ヶ浦海岸視察 野田中学校 (5) 副校長講話 (6) 仮設住宅見学 (7) 作文書き	・児童会代表者2名が館長に手交する。 ・話をよく聞き、用意した質問をする。 ・現地に足を運び、惨状を目に焼き付ける。 ここでも当日の様子を質問する。 ・海岸まで下りて、砂浜の様子を知る。 津波の高さや強さを知る。 瓦礫が分別されていることに気付く。 ・被災直後の様子やその後何日かの緊迫した様子を聞き取る。 ・中学校の校庭にある仮設住宅の様子を外観から見る。 ・記憶の新しいうちに自分が体験してきた思いや感じたことを書き留める。	・代表あいさつの指導をする。 ・質問が出るように促す。 ・見ておくべきポイントを示しながら、伝えなければならない大事なポイントをしっかりメモするように指導する。  ・不自由な生活状況を感じ取らせる。 ・時間をおかずに感動や感激が新鮮なうちに研修記録としてまとめさせる。
事後	3 全校学習 学習発表会での児童会執行部によるまとめの発表 (1) 取材の発表 (2) 感想の発表	【パワーポイントを活用した発表】 ・自分達が学んできたことや取材してきたことを、写真を活用して発表する。 ・3名の感想文を紹介し、取材を通じて分かったことや感じ取ったことを発表し、さらに将来に対する思いや願いを表現した。	・写真の選定や構成等にアドバイスし、見る側の立場になった編集をする。 ・書き留めた子どもの言葉を大切に、子どもの言葉を生かしながら、分かりやすい文章にまとめるよう指導する。

◆活動の評価

- ◎分かりやすい内容にまとめ上げ、集まっている観客に広く周知することができた。
- ◎自分が感じ取ったことを自らの言葉で表現し、聴衆に共感を与え、感動を広げることができた。
- △予算等の兼ね合いもあり、児童の主体的活動が一部に限られたことが少し残念であった。